

第2章

群馬県の生物多様性・生態系サービス等の 現状と課題

第1節 群馬県の自然環境の特徴

1 自然環境

1 自然環境

1 気候

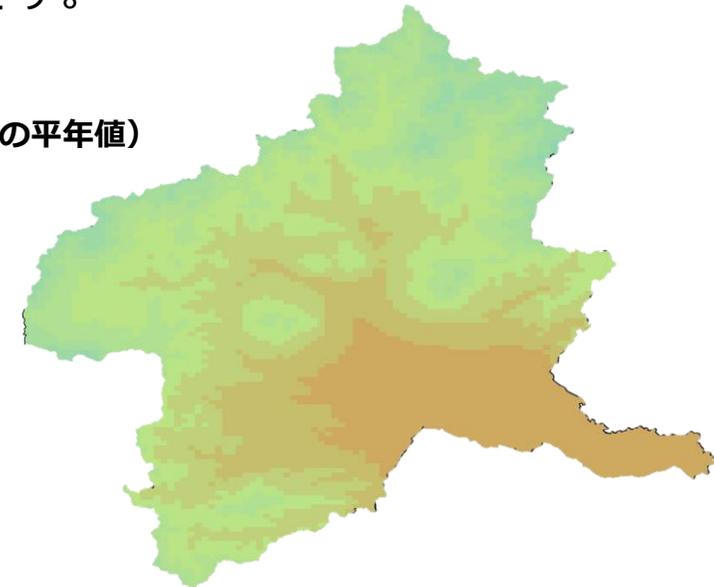
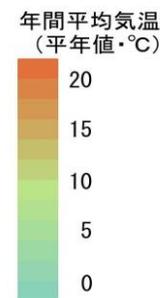
1 群馬県の気候区分

本県は内陸県であり、県土のほとんどが太平洋側気候に区分されます。しかし、標高差が大きく、山や谷、平野部が入り交じる地形のため、山岳気候や平地気候が混在しています。

このことは気温にも影響し、厳冬期には山間部で氷点下10℃以下、盛夏期の平野部では約40℃まで上昇するなど、地域ごとの気象の変化が大きいことも特徴です。

こうした多様な気候は、地域性豊かな生物多様性を育む基盤となり、地域ごとにその気候に適応した動植物が生息・生育することで、多様な自然資源が形成されています。さらに、人々の生活基盤にも深く関わっており、地域ごとの気候特性に応じて、水利用の方法や防災対策などが異なり、地域ごとに独自の自然と共生する生活様式が育まれてきました。

年平均気温の分布
(1991~2020年の平年値)



※以下の出典を基に作図

- ・平年値メッシュ 2022年度(令和4年度)版(国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)
- ・基板地図情報(数値標高モデル10m)(国土地理院 基板地図情報ダウンロードサービス)
- ・第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査 1/25,000植生図GISデータ(環境省生物多様性センター)
- ・行政区画データ 行政区画 第2.3版(国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)

1 自然環境

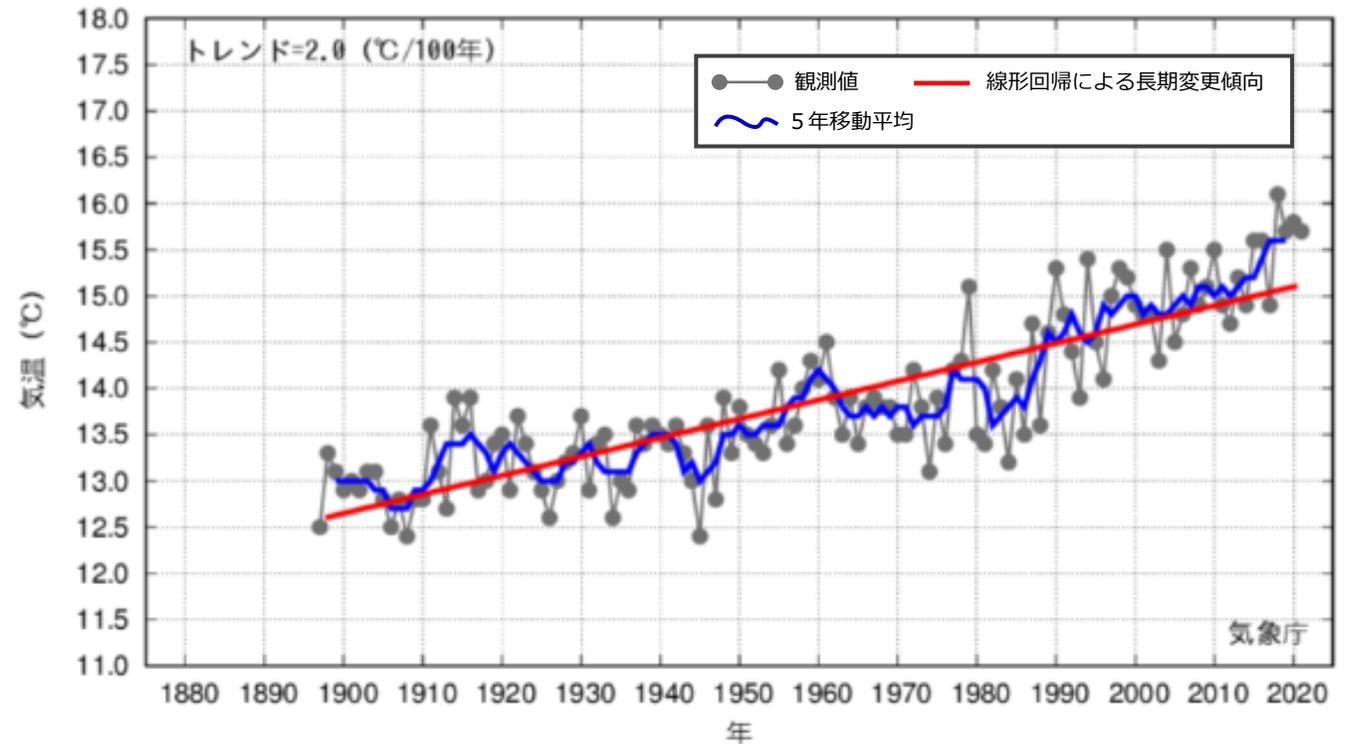
1 気候

2 群馬県の気温

我が国の年平均気温は、気候変動の影響で特に1990年代以降、高温となる年が多くなっています。

本県の年平均気温も、同様に過去100年間と比較して、年々上昇傾向にあります。気温の上昇は農作物に影響したり、災害リスクを高めたりする可能性があり、本県でも今後の動向を詳細に把握する必要があります。

群馬県（前橋市）の気温のこれまでの変化（平均気温）



出典：気象庁東京管区气象台「群馬県の気候変化」、「群馬県の気温のこれまでの変化」を一部改変

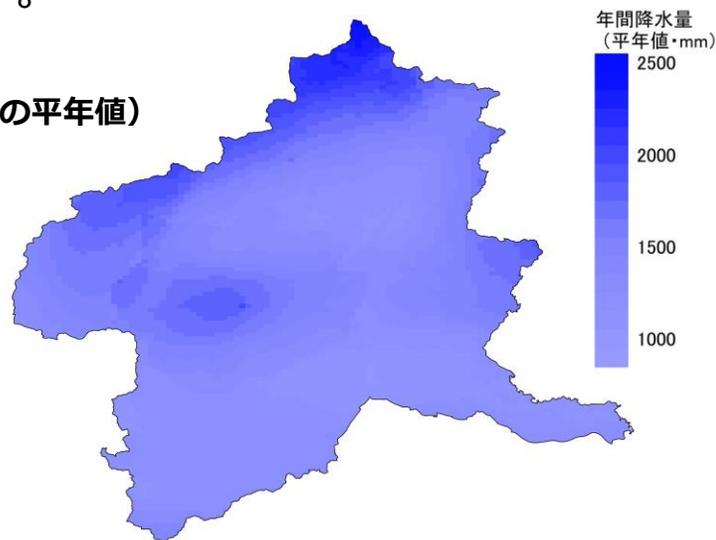
1 自然環境

1 気候

3 群馬県の降水量

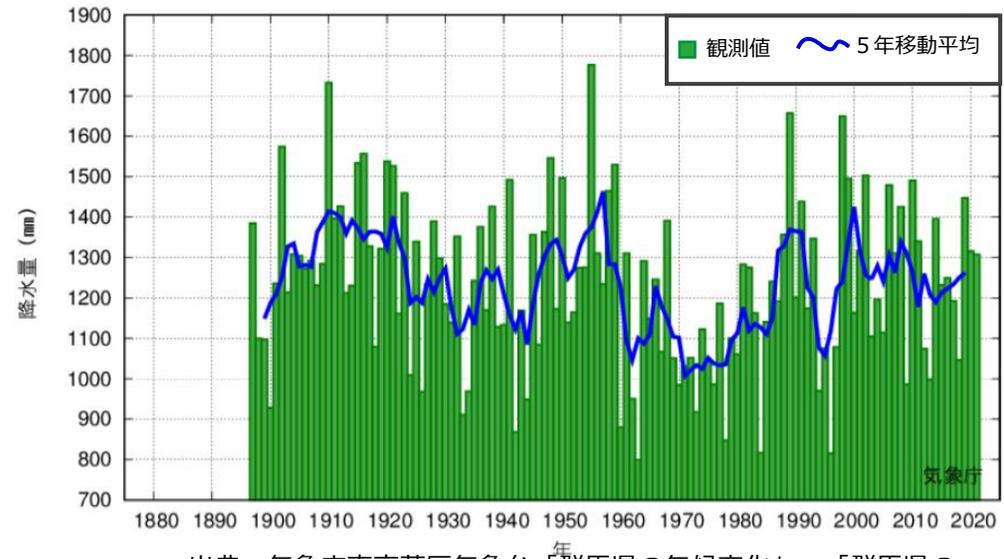
本県の年間降水量は、平野部よりも、冬期の降雪が多い山間部で多い傾向となっています。ただし、南海上からの暖湿流の影響を受けやすい榛名山（高崎市）では年間降水量が約2,000mmと多いのに対して、利根沼田地域の降水量は平野部と同程度と、山地部の中では比較的少なくなっており、降水量も複雑に分布しています。このことは、森林構成や動植物の分布など自然環境の違いを生む一因となっています。

年降水量の分布
(1991~2020年の平年値)



※以下の出典を基に作図
・基板地図情報（数値標高モデル10m）（国土地理院 基板地図情報ダウンロードサービス）
・第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査 1/25,000植生図GISデータ（環境省生物多様性センター）
・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）
・平年値メッシュ 2022年度（令和4年度）版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

群馬県（前橋市）の降水量のこれまでの変化



出典：気象庁東京管区气象台「群馬県の気候変化」、「群馬県の降水量のこれまでの変化」を一部改変

1 自然環境

2 地形・地質・土壌

1 群馬県の地形の概要

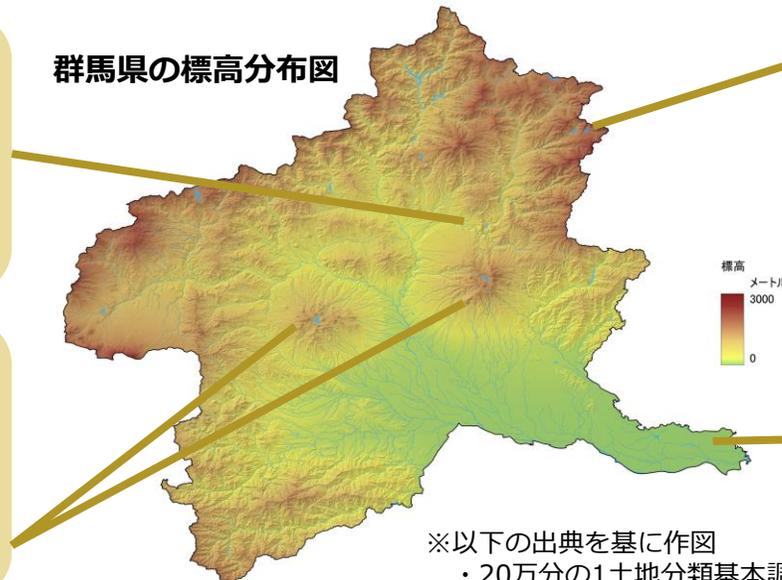
本県は海拔約13メートルから森林限界を超える2,578メートルまでの標高差を有します。標高はおおむね県境付近の山地で高く、県中部にむかって次第に低くなり、県央から東部にかけて平野となっています。また、標高差の違いによって河岸段丘や湿地など、様々な地形が生まれています。このことは、群馬県の様々な気候分布や、動植物の多様性にも深く関連しています。

利根沼田地域では、平野部に流れ込む利根川水系の河川による浸食作用と大地の隆起運動により、階段状の雄大な河岸段丘が形成されています。

県央部では関東山地などの非火山性山地と、赤城山や榛名山などの火山が点在しています。



群馬県の標高分布図



山間部では泥炭を中心に成りたつ、尾瀬ヶ原などの湿原が点在しています。



県南東部の沖積地では湿地が発達しています。

※以下の出典を基に作図

- ・20万分の1土地分類基本調査（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）
- ・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

1 自然環境

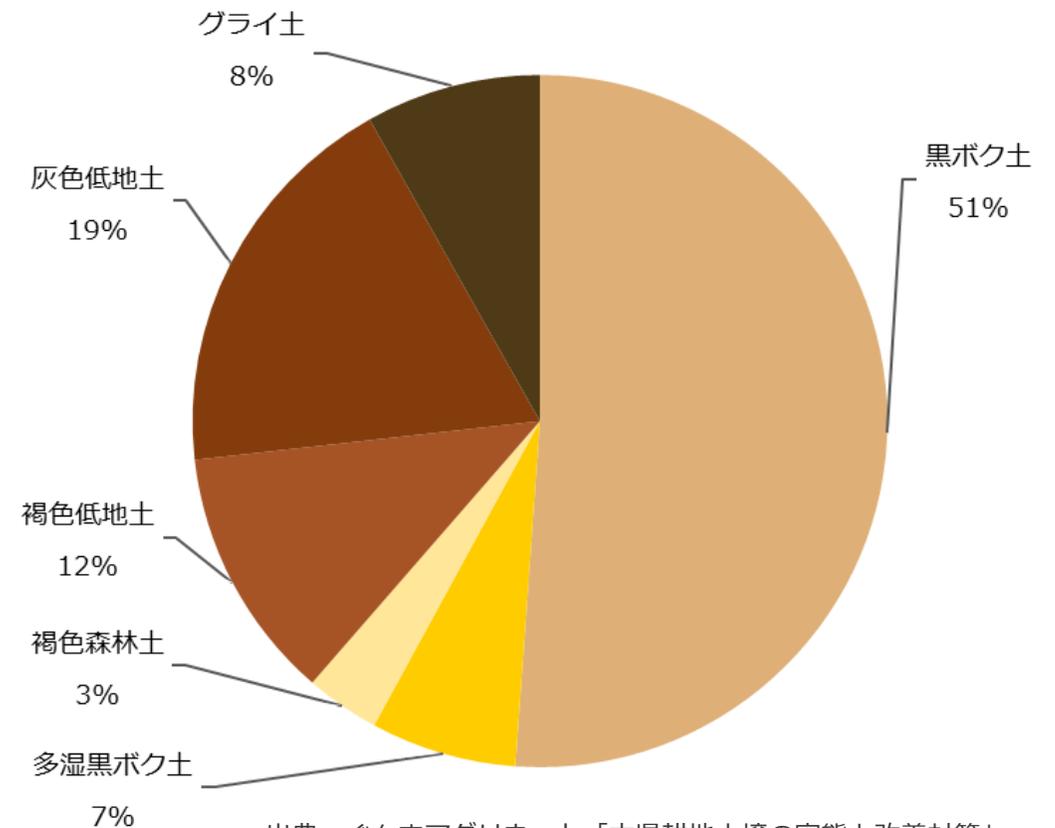
2 地形・地質・土壌

2 群馬県の土壌

本県の土壌は、火山活動を起源とし、畑作に適した黒ボク土や、日本の水田の代表的な土壌で季節的地下水の飽和により発達した灰色低地土、火山灰の影響の少ない山地・丘陵地に分布する褐色あるいは黄褐色の次表層をもつ褐色森林土などが分布しています。

本県ではこの肥沃な土壌環境を利用し、多種多様な農産物が生産され、農業も本県の主要産業のひとつとなっています。

群馬県内の耕地における土壌群の割合



出典：ぐんまアグリネット「本県耕地土壌の実態と改善対策」

1 自然環境

2 地形・地質・土壌

3 群馬県の火山とその利用

本県には5つの活火山（浅間山、草津白根山、日光白根山、赤城山、榛名山）があります。

火山は噴火により災害を引き起こしますが、私たちの暮らしに欠かせない資源の供給源でもあります。例えば、草津白根山などではかつて硫黄の採掘が行われるなど、産業の一部となっていました。また、火山は温泉の供給源でもあり、群馬県の観光業を支える重要な自然資源でもあります。

一方、過去には噴火により命や居住地が奪われるという歴史があったことも事実です。

このように私たちヒトは常に「自然の力」と向き合いながら、生活しているのです。



万座温泉

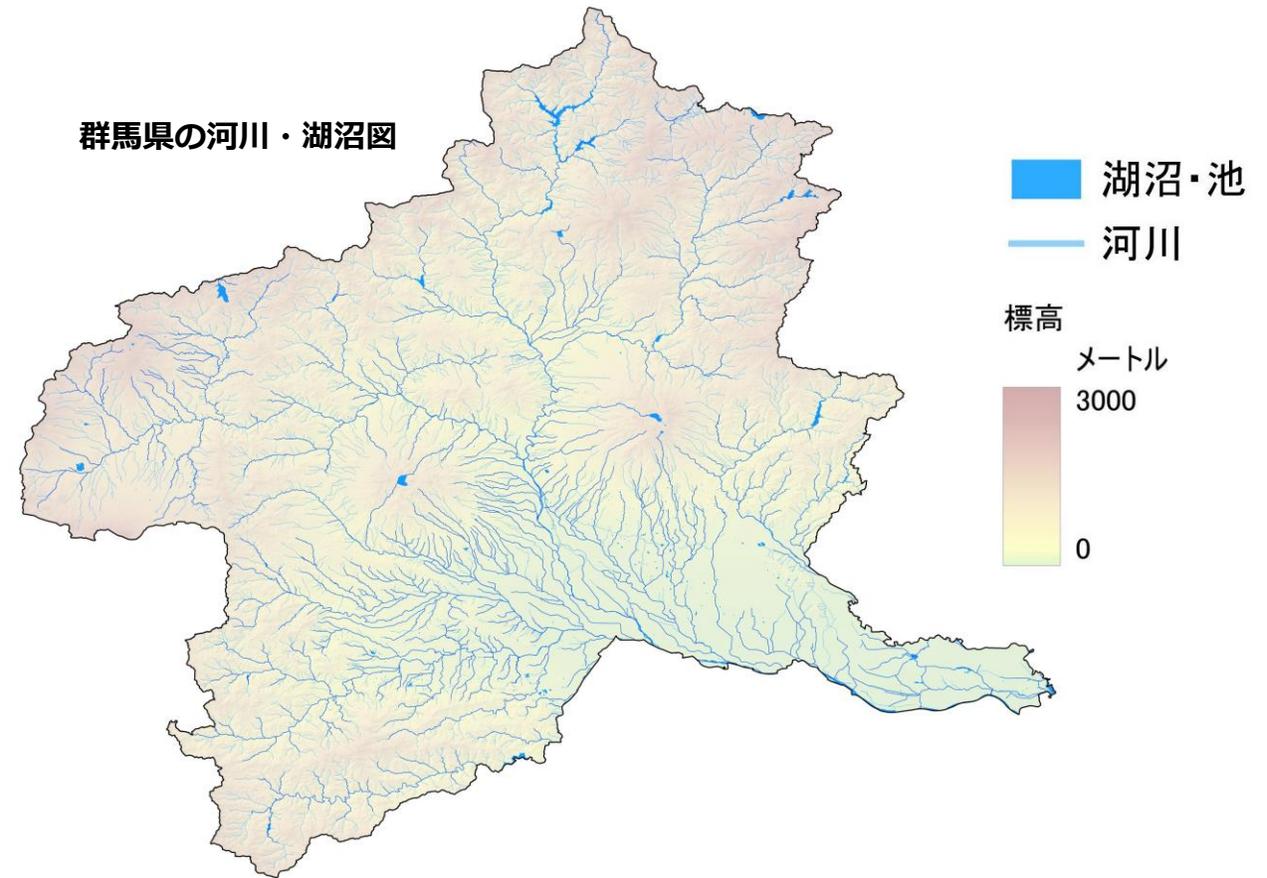
1 自然環境

3 水環境

1 群馬県の水環境

本県は日本一の流域面積を誇る利根川の上流部に位置し、変化に富んだ地形・地質・気候、さらに豊かな森林と土壌による水の涵養機能により、多様な水環境を有しています。

これらの水環境は、生物多様性を育むとともに、清澄な水を生み出し、飲料水などに幅広く利用されています。こうした水の利活用は、県民生活や地域経済を支える重要な基盤となっています。



※以下の出典を基に作図

- ・基板地図情報（数値標高モデル10m）（国土地理院 基板地図情報ダウンロードサービス）
- ・第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査 1/25,000植生図GISデータ（環境省生物多様性センター）
- ・河川データ 2009年度～2006年度（平成21年度～平成18年度）版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）
- ・行政区画データ 行政区画 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

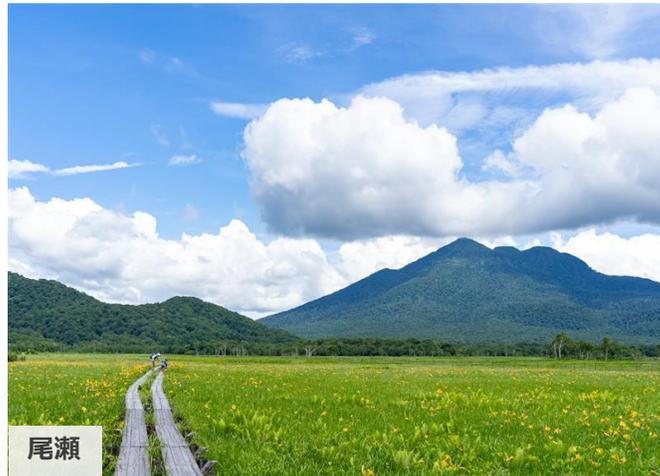
1 自然環境

3 水環境

② ラムサール条約湿地

本県各地にある湿地のうち、尾瀬・渡良瀬遊水地・芳ヶ平湿地群の3つは、湿地を保全するための国際条約である「ラムサール条約」に基づき、ラムサール条約湿地として登録されています。これらの湿地では、湿地生態系の保全とエコツーリズムによる自然の持続的活用の取組が行われています。

湿地の保全は、水資源の供給や水質浄化、災害・気候変動対策、食料資源の供給等の生態系サービスによる経済的価値の創出に寄与します。



尾瀬



渡良瀬遊水地



芳ヶ平湿地群

1 自然環境

4 植物

1 群馬県の植物の概要

本県の植物相が網羅された「群馬県植物誌改訂版」では、これまでに記録された植物は3,203種と記載されています。

本州では分布地点が少ない種のほか、本県やその隣接地域が分布の限界となる種、火山活動等に由来する超塩基性岩や奥多野地域などにみられる石灰岩といった特殊な立地に依存する種など、もともと希少性が高い種が多く、気候や地形が多様であることなどから、種の多様性が高いと考えられています。



オゼコウホネ



ヒメウラジロ

1 自然環境

4 植物

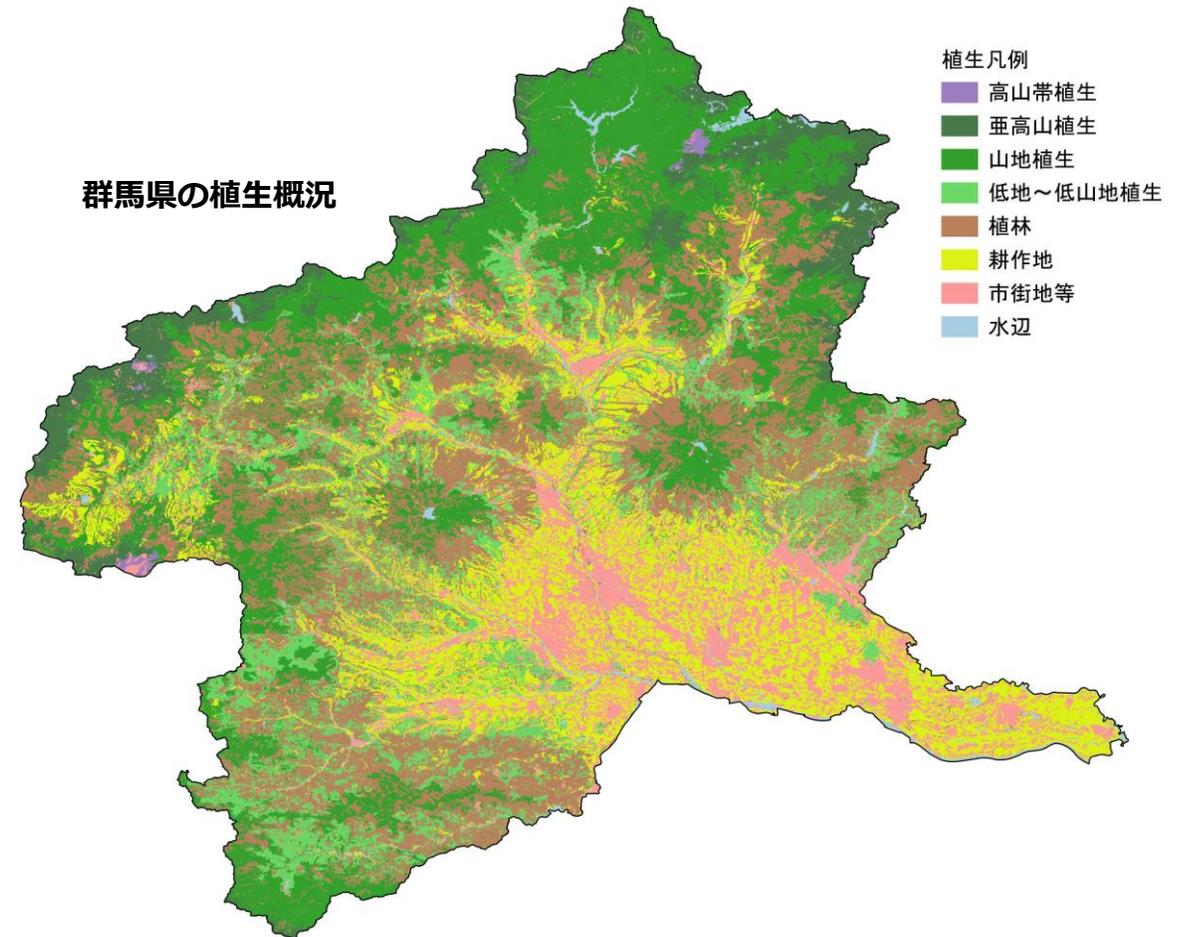
2 群馬県の植生

本県は、標高差が大きい地形や特徴的な地質、多様な気候区分により、地域ごとに様々な植生が混在しています。

低地にはクヌギ・コナラ林が、中・高地にはブナやミズナラ林が広がり、尾瀬などの高山帯ではオオシラビソなどが見られます。

また、同じ標高帯であっても、冬に乾燥する気候域、寒冷で多雨の気候域、積雪の多くなる候域など、気候域によっても植生が異なります。

このような植生の多様性は、生息する動物の多様性にも寄与しています。



※以下の出典を基に作図

- ・第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査 1/25,000植生図GISデータ（環境省生物多様性センター）
- ・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

1 自然環境

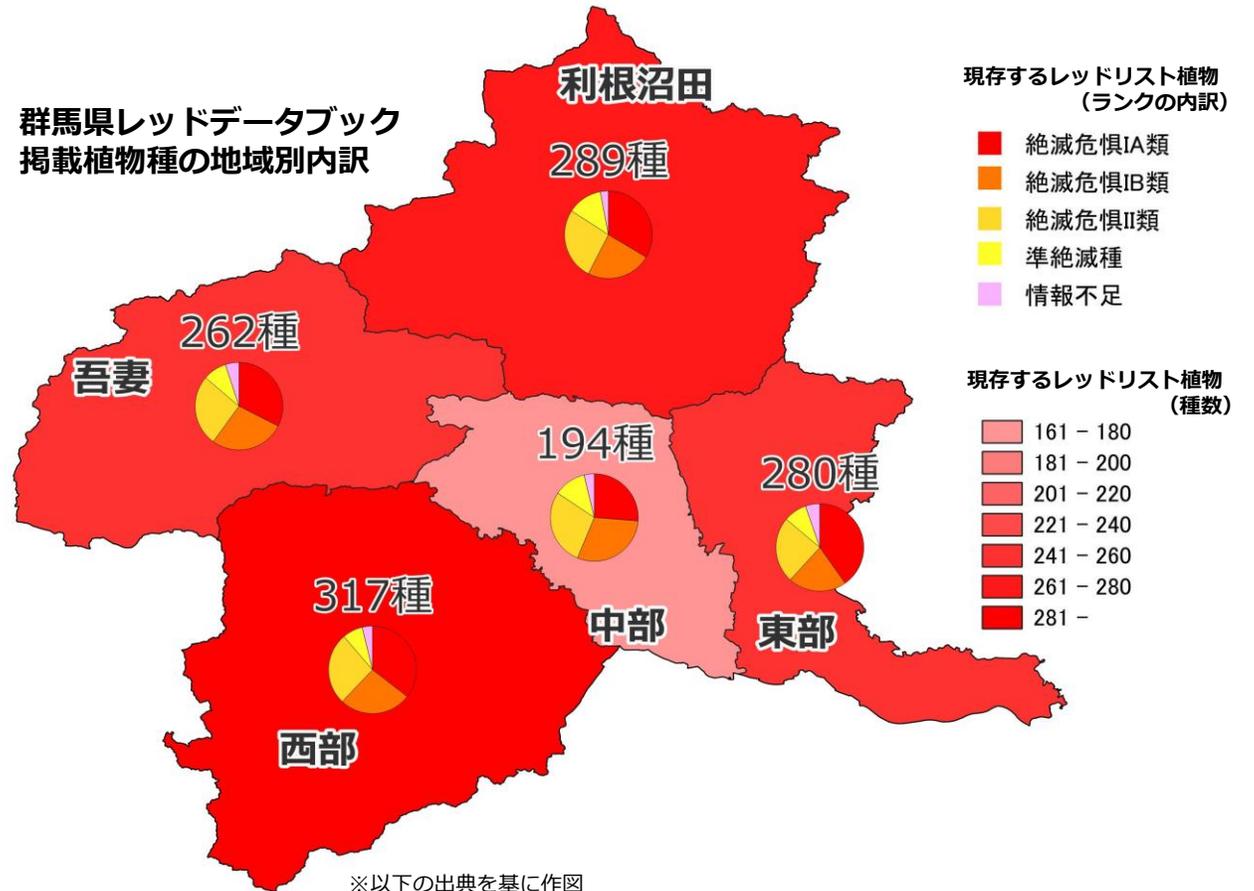
4 植物

3 群馬県の絶滅危惧植物

本県の絶滅のおそれのある植物の種数は、維管束植物で合計 669種となっています（2025（令和7）年時点）。2012（平成24）年時点では633種であり、絶滅の危機に瀕する植物が増えていることがわかります。

地域別の種数をみると、中部を除く4地域において200種以上が記録されています。

それ以外に、2024（令和6）年に「レッドデータブック群馬2022植物編」の部分改訂で追加となったコケ植物は、計53種が絶滅のおそれのある種とされています。特に人口の比較的多い東部では、危機的な状況となっています。



※以下の出典を基に作図

- ・群馬県植物レッドリスト（2024年部分改訂版）
- ・群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 群馬県レッドデータブック 植物編2022年改訂版
- ・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

1 自然環境

5 動物

1 群馬県の動物の概要

最新の「レッドデータブック群馬2022」では、これまでに記録されている動物の種数は、哺乳類47種、鳥類328種、爬虫類15種、両生類18種、魚類約60種、貝類143種、クモ類453種とされています。

昆虫類は現在5,000種以上の記録があるものの、未調査の分類群が数多くあるため、実際にはそれ以上の種数の昆虫が生息していると考えられます。



マユタテアカネ



ニホンカナヘビ

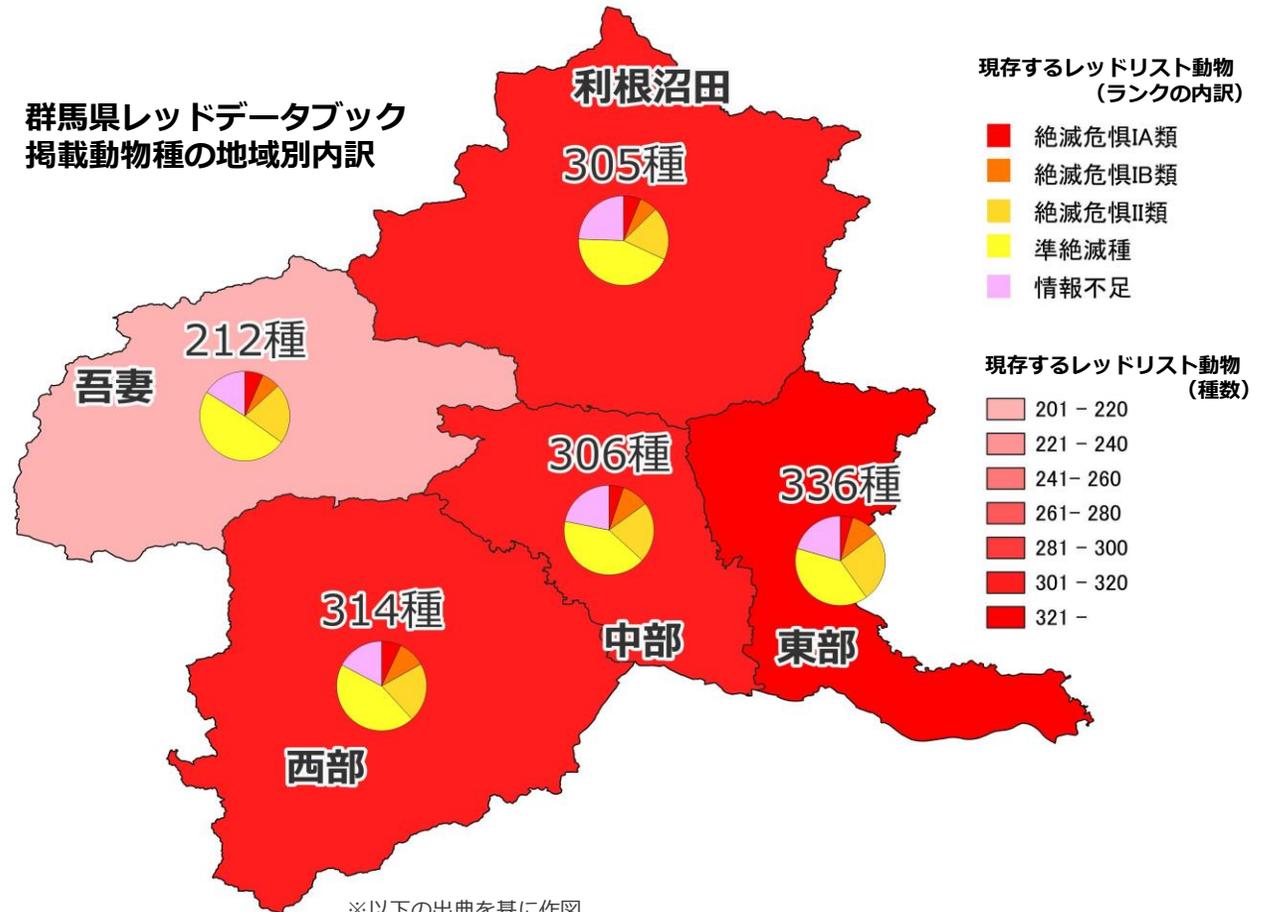
1 自然環境

5 動物

2 群馬県の絶滅危惧動物

本県の絶滅のおそれのある動物の種数は、脊椎動物（哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類）143種、無脊椎動物（昆虫・甲殻類・貝類・その他）408種の合計 551種となっています（2022（令和4）年時点）。2012（平成24）年時点では387種であり、植物同様に絶滅の危機に瀕する動物が増えています。

特に昆虫類は、2012（平成24）年時点では201種であったものが、2022（令和4）年時点では326種と大きく増えています。



※以下の出典を基に作図
・群馬県動物レッドリスト（2024年部分改訂版）
・群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 群馬県レッドデータブック 動物編2022年改訂版
・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

第2章

群馬県の生物多様性・生態系サービス等の 現状と課題

第1節 群馬県の自然環境の特徴

2 生物多様性と暮らし

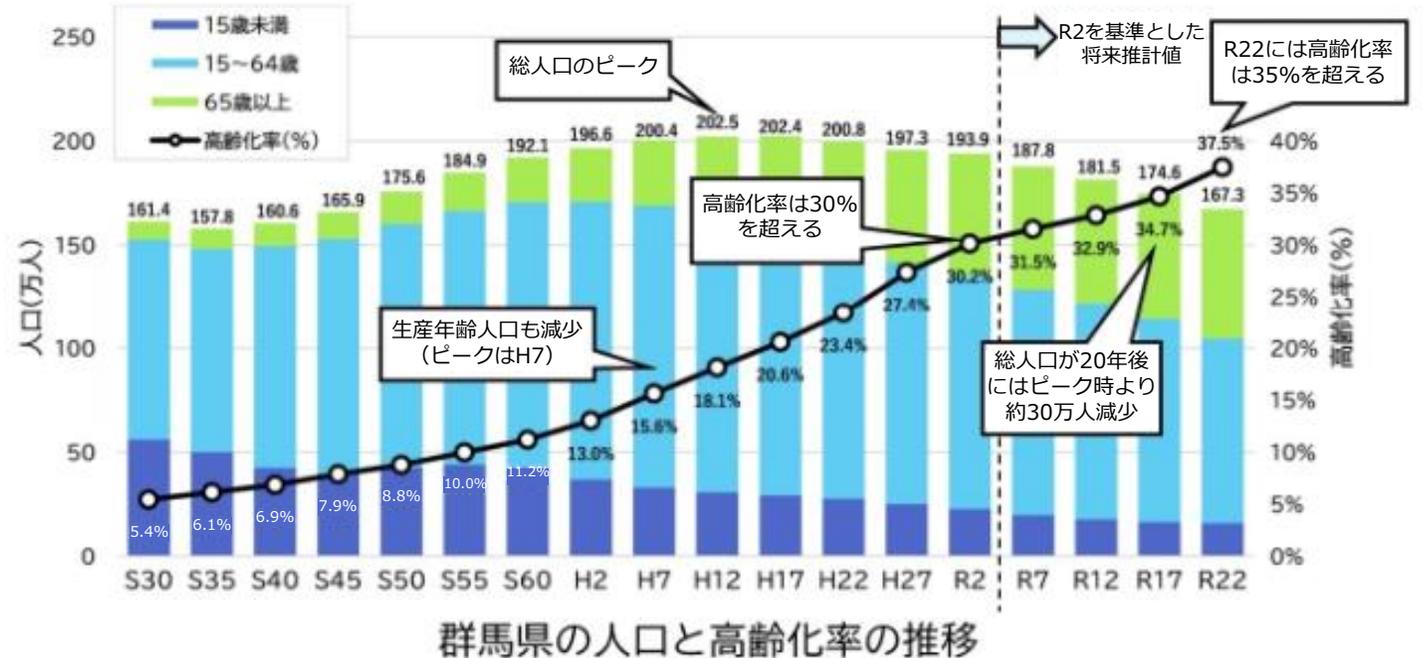
2 生物多様性と暮らし

1 群馬県の人口

本県の総人口は2000（平成12）年の202.5万人をピークに減少に転じており、2020（令和2）年時点では、193.9万人まで減少しています。さらに、2040（令和22）年には167.3万人となり、ピーク時の82.6%まで減少すると想定されています。

高齢者人口は、2000（平成12）年の36.7万人から2040（令和22）年には1.7倍増加の62.7万人となり、総人口に対し37.5%が高齢者となるなど、高齢化の更なる進展が見込まれています。

人口減少と高齢化は、里山の荒廃や耕作放棄地の増加など、生物多様性の「負の側面」にも関連します。



出典

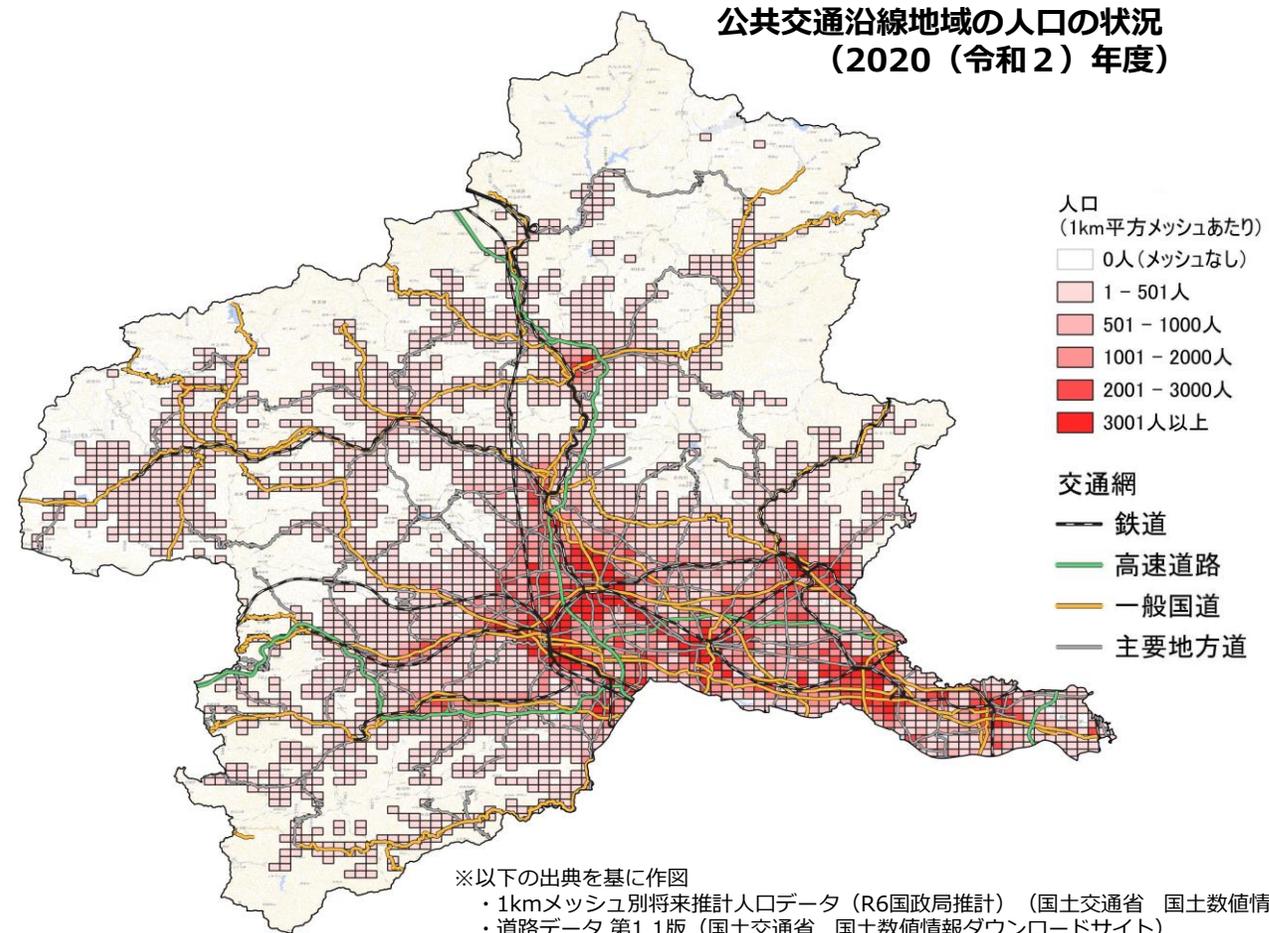
- ・「群馬のまちの現状について」（群馬県）
- ・昭和30年～令和2年は各年国勢調査
- ・令和7年～令和22年は国立社会保障・人口問題研究所による令和2年を基準とした推計値

2 生物多様性と暮らし

2 群馬県の人口動態とインフラ

群馬県の人口は、特に高崎市、前橋市、伊勢崎市、太田市の都市部に集中しています。北部や西部に広がる山間地域では人口が著しく少なく、深刻な過疎化の問題に直面しています。

道路交通網は、前橋市・高崎市を中心に各地域を網羅するように整備され、山間部と都市部の好アクセスを実現しています。一方、人やモノの移動が容易になることで、外来種の生息範囲拡大につながっている可能性もあり、生物多様性にとって負の側面もあります。



※以下の出典を基に作図

- ・1kmメッシュ別将来推計人口データ (R6国政局推計) (国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)
- ・道路データ 第1.1版 (国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)
- ・重要物流道路データ 第1.1版 (国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)
- ・行政区画データ 行政区画 第2.3版 (国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト)
- ・地理院タイル淡色地図 (国土地理院)

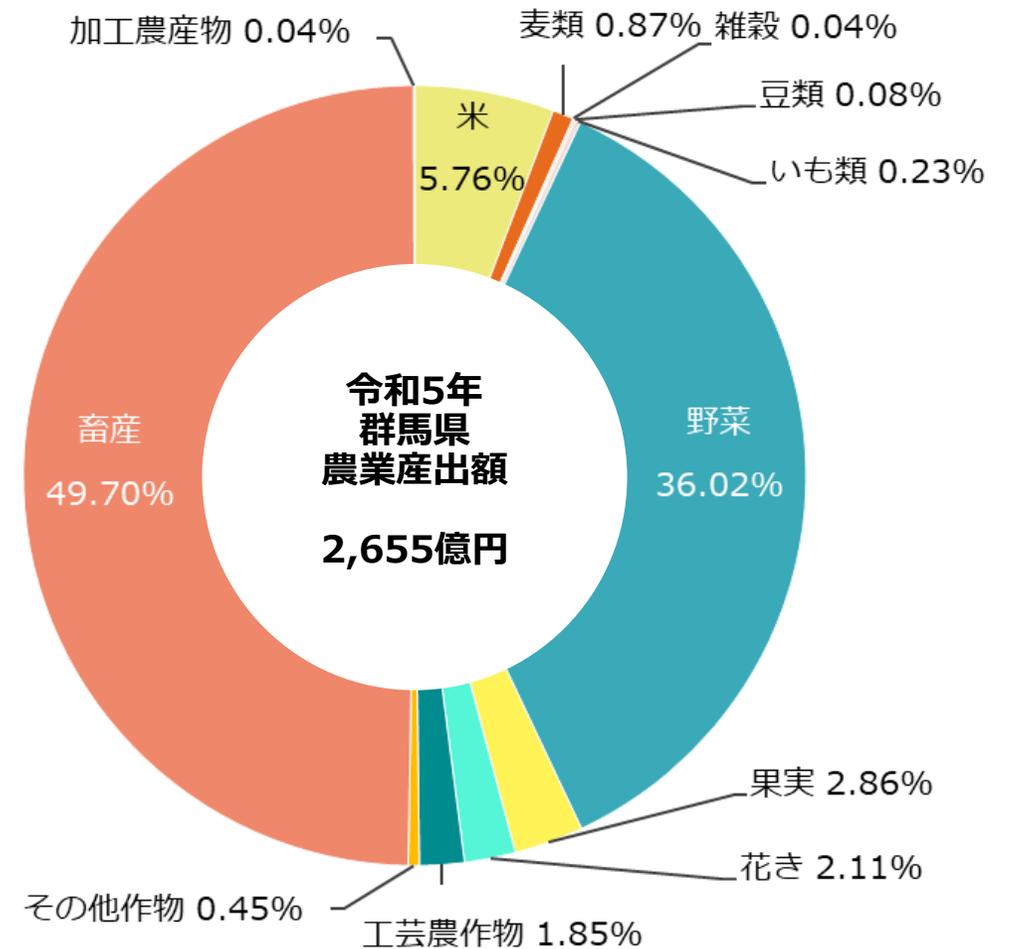
2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

1 群馬県の農業生産

本県では、豊富な水資源や標高差のある地形、全国トップクラスの日照時間などを生かし、多種多彩な農畜産物の生産が可能となっています。例えば、夏でも冷涼な吾妻地域では夏秋キャベツが、北毛地域ではレタスの生産が盛んです。

また、首都圏へのアクセスの良さを生かし、これらの農畜産物は消費地である首都圏を中心に供給されています。



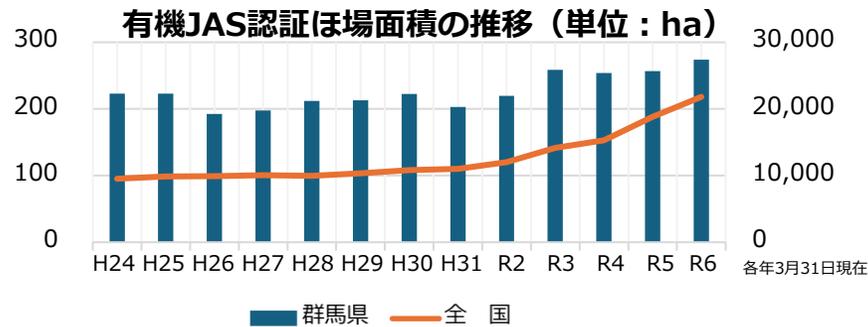
出典：農林水産省「生産農業所得統計」を基に作成

2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

2 群馬県の農業の動向

近年、地球温暖化防止や生物多様性の保全などの環境意識等への高まりにより、みどり認定（ぐんまエコファーマー）、特別栽培農産物認証制度、有機JAS認証を取得する農業者が増加傾向にあります。これらの取組を推進することで、農業を環境と調和しながら持続的に発展させることができます。



群馬県の取組

①ぐんまエコファーマー

取組内容

- 土づくりを行いながら、従来の自分の栽培と比べ、化学肥料と化学合成農薬を**2割以上低減**。
※温室効果ガスや農業用プラスチックの排出削減などの取組も対象。



③有機農産物

取組内容

- 化学肥料と化学合成農薬を**使用せず**、遺伝子組換え技術を利用しません。
- 「有機JAS認証」を受けた農産物のみ「有機農産物」や「オーガニック」と表記することができます。



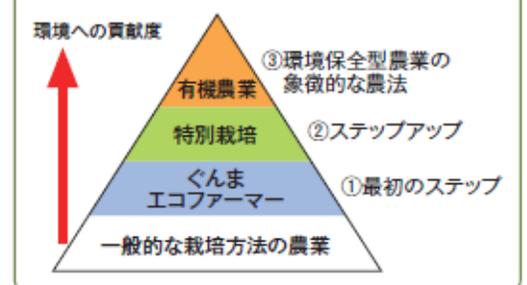
②特別栽培農産物

取組内容

- 県の慣行基準（県内の一般的な栽培）と比べ、化学肥料と化学合成農薬を**5割以上低減**。



【環境に優しい農業の発展段階】



出典：群馬県「環境に優しい農業を応援しよう！」

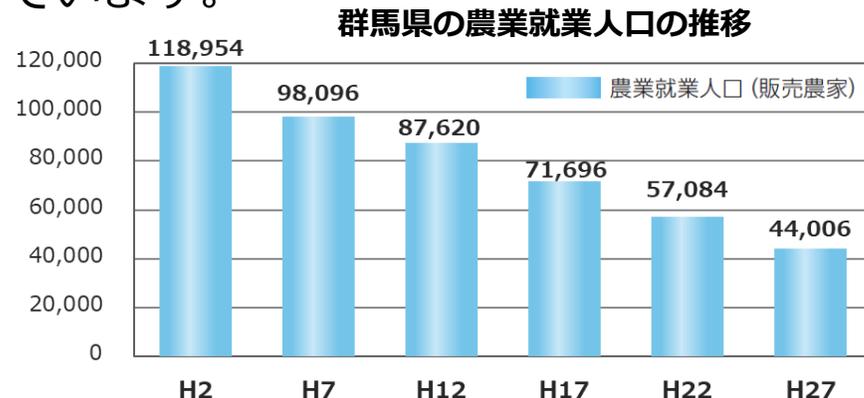
2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

3 群馬県の農業従事者の現状

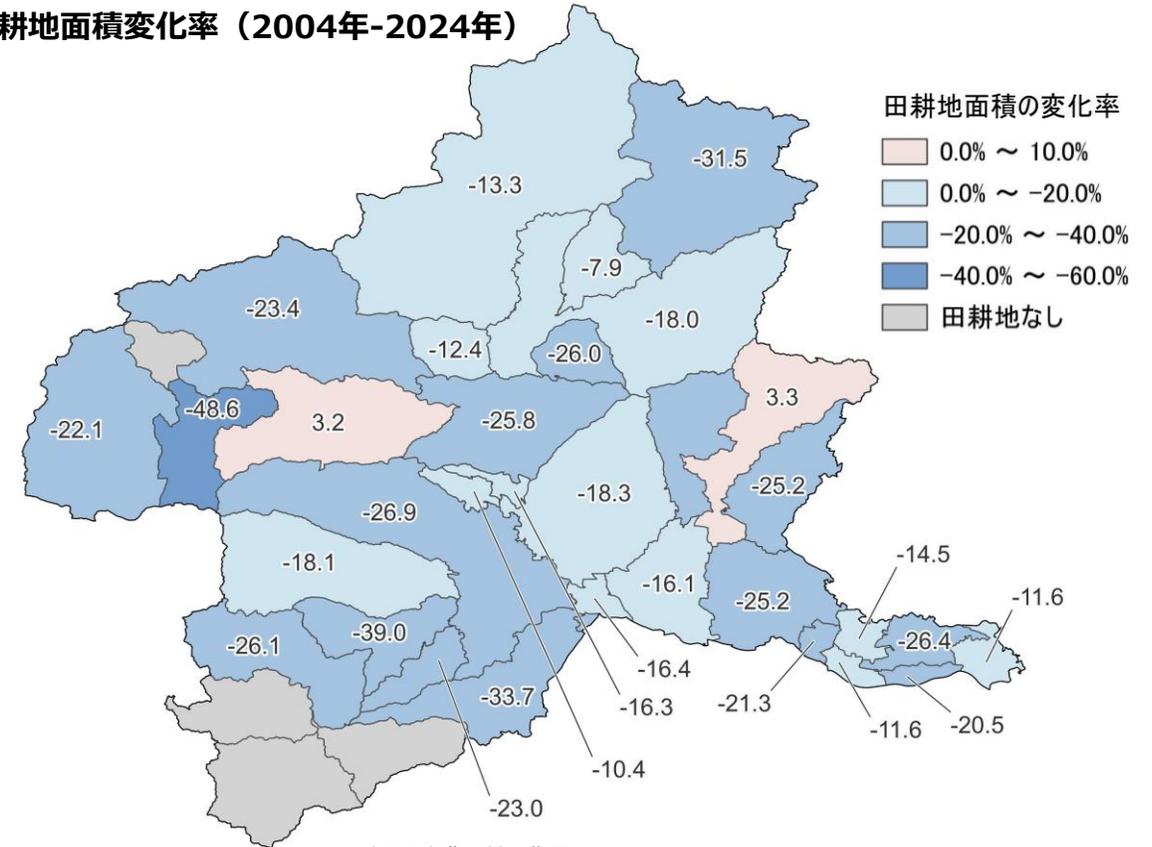
本県では、農業従事者の減少や高齢化が進んでいます。農業就業者数は25年間で約60%が減少しました。

また、未利用農地の増加により、田耕地面積は減少傾向にあり、県全体でも過去20年間で20%以上の田耕地の減少がみられた市町村が半数以上を占めています。



出典：群馬県農業農村整備計画2020（ぐんま水土里保全整備プラン）

田耕地面積変化率（2004年-2024年）



※以下の出典を基に作図

- ・作物統計調査 令和6年産市町村別データ（農林水産省）
- ・行政区域データ 行政区域 第2.3版（国土交通省 国土数値情報ダウンロードサイト）

2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

4 群馬県の農業被害の現状

昨今の地球規模での気候変動の影響により、本県でも気象災害が頻発しています。農業への影響は著しく、夏季の気温上昇によるりんごの「日焼け果」や米の「白未熟粒」などの品質低下、台風やゲリラ豪雨による農業被害が増加しています。

野生鳥獣による農作物被害も深刻であり、令和5年度被害額は約3億2,255万円でした。

農業者の経済的損失のみならず、営農意欲の減退、耕作放棄地の増加による生物多様性の低下などをもたらすため、総合的な対策が必要となっています。

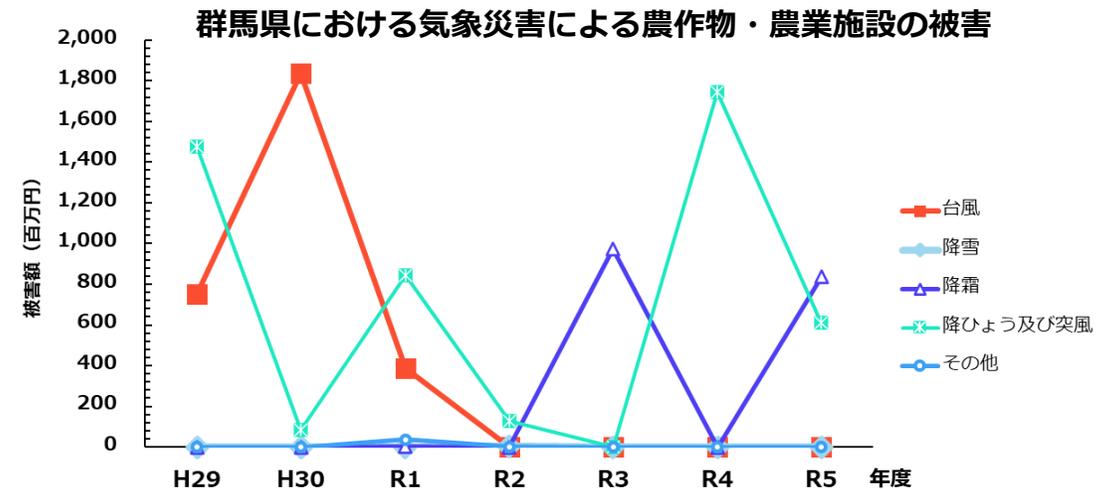
りんご日焼け果



米の白未熟粒



出典：群馬県気候変動適応センター「気候変動適応レター第1号」



出典：「令和6年度 群馬の農業」を基に作成

2 生物多様性と暮らし

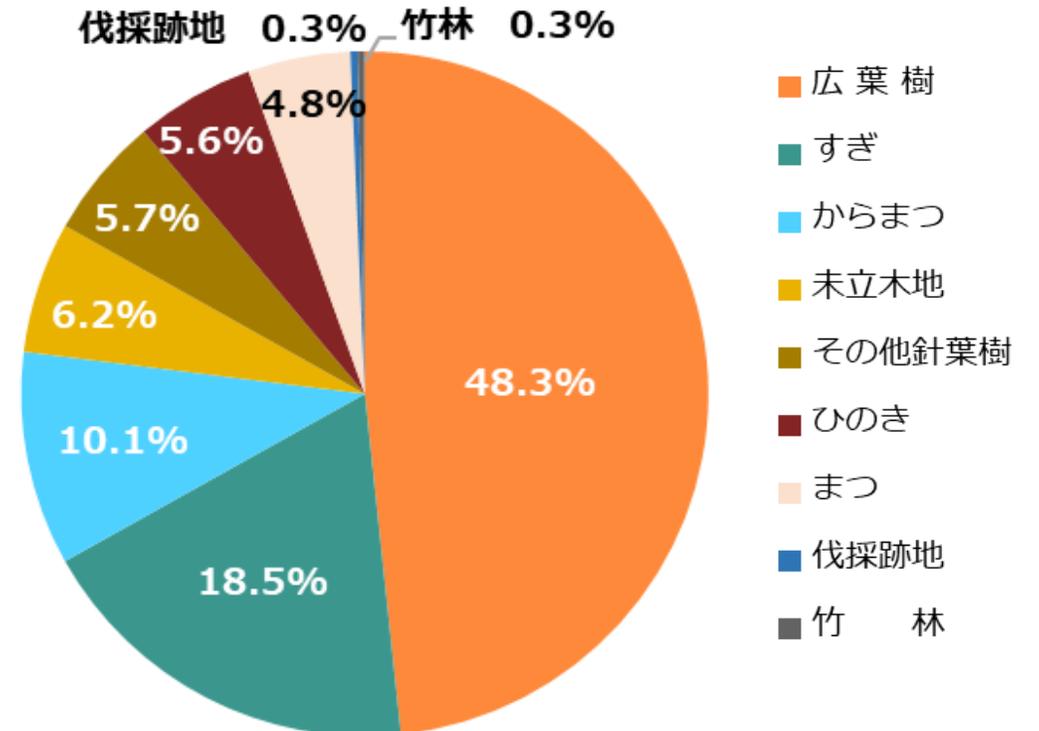
3 農林水産業と食糧

5 群馬県の森林

本県は県土面積の3分の2を森林が占めており、その面積は約42万7千haで「関東一の森林県」となっています。

群馬県の森林のうち、約半数は広葉樹ですが、スギ、カラマツなどを中心とした人工林も広く分布しています。人工林では伐採適齢期とされる51年生以上の森林が全体の74%を占めています。

群馬県の森林の樹種別面積割合
(2024年3月31日現在)



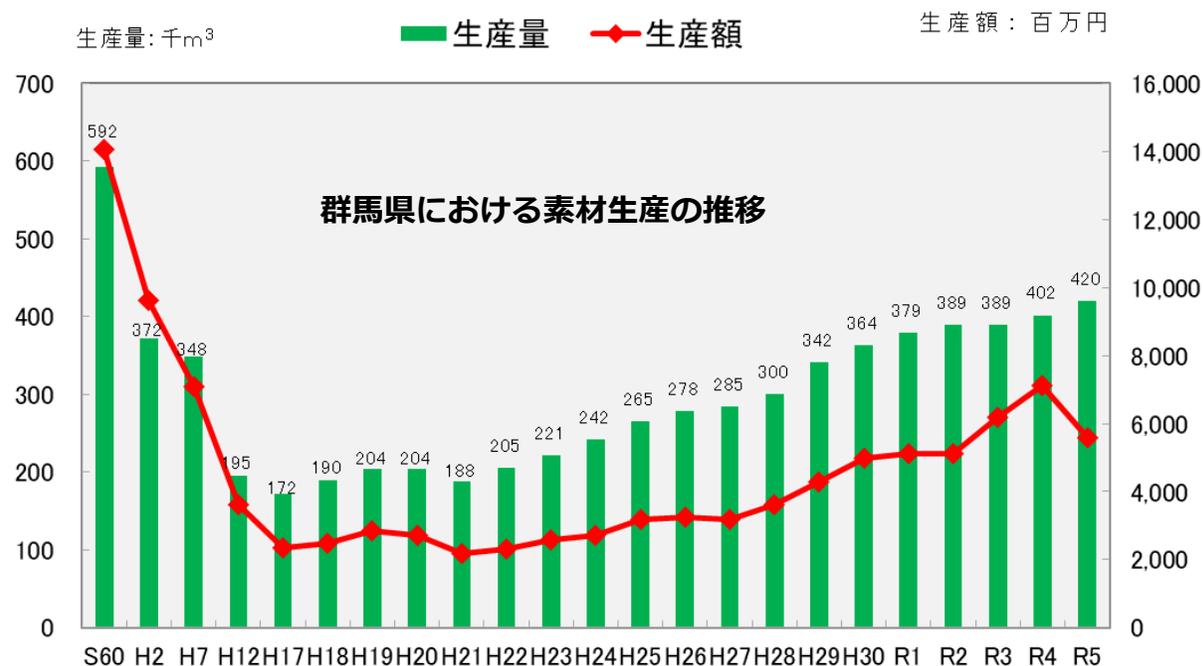
出典：群馬県統計情報提供システム森林林業統計書（令和6年版（2024年））

2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

6 群馬県の林業生産

本県の林業は、江戸時代から薪炭材や建築材の供給地として発展し、特にスギやヒノキの植林が進められました。戦後は復興需要により伐採と再生林が盛んに行われ、人工林が拡大しました。



出典：ぐんまの森林・林業2024年版

本県の素材生産量（木材生産）は、1966（昭和41）年の89万2千m³をピークに減少してきました。しかし、2006（平成18）年以降は景気悪化の影響を受けた2009（平成21）年を除いて、上昇に転じています。

生産額も同様の推移となっていました。2023（令和5）年は減少しており、木材生産と価格のバランスの均衡を保つことが、経済面での課題となっています。

2 生物多様性と暮らし

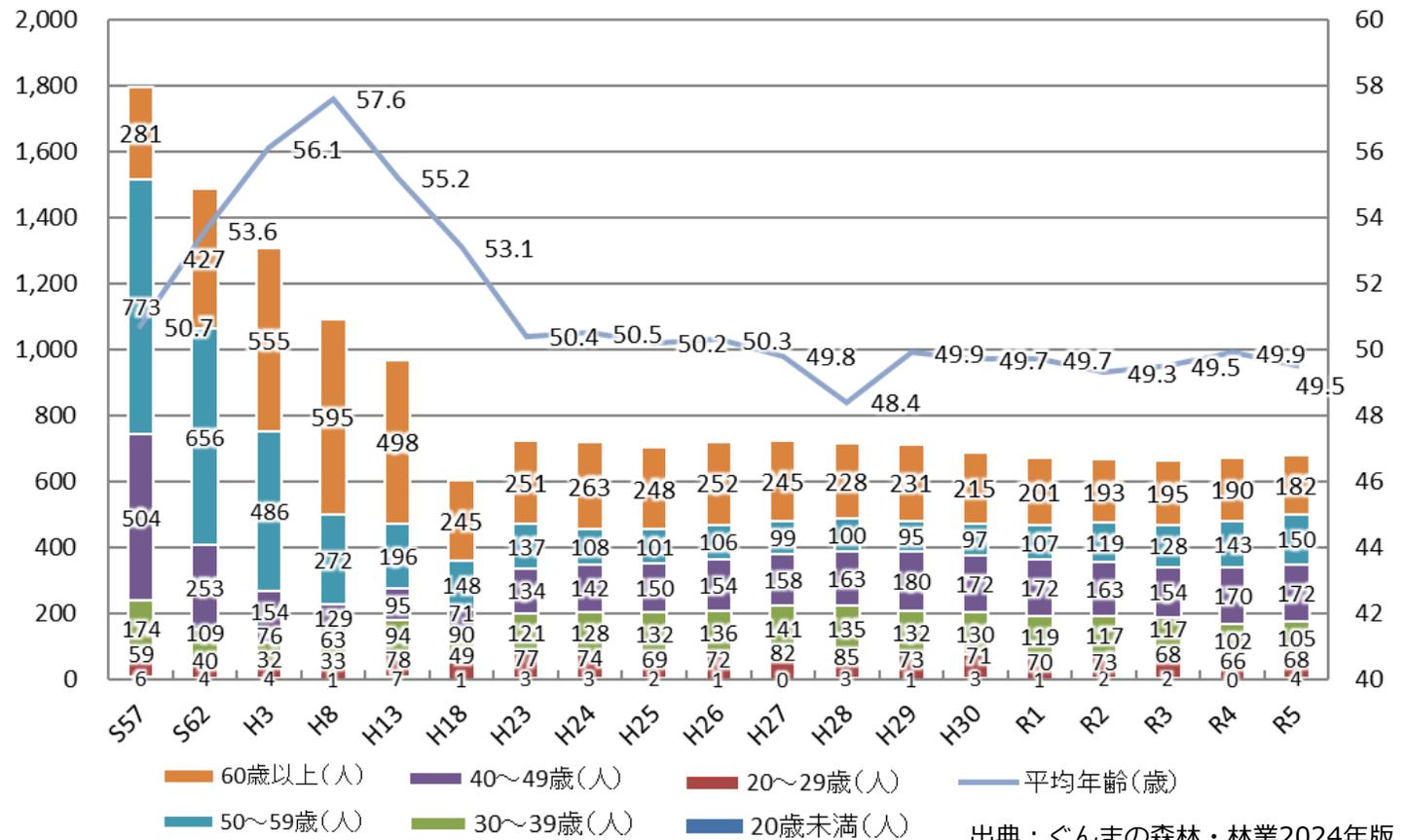
3 農林水産業と食糧

7 群馬県の林業従事者の現状

本県の林業従事者は、1982(昭和57)年度の1,797人から減少の一途をたどり、2006(平成18)年度には604人にまで減少しました。その後一時回復したものの、近年は700人を下回る人数で推移し、2023(令和5)年度は681人となっています。また、60歳以上の割合は約3割と依然として高く、今後、退職等による減少が懸念されています。

林業従事者の減少は、適切な森林管理を困難にさせ、森林の公益的機能や生物多様性の保全にも影響を及ぼします。

年齢階層別林業従事者数と平均年齢の推移



出典：ぐんまの森林・林業2024年版

2 生物多様性と暮らし

3 農林水産業と食糧

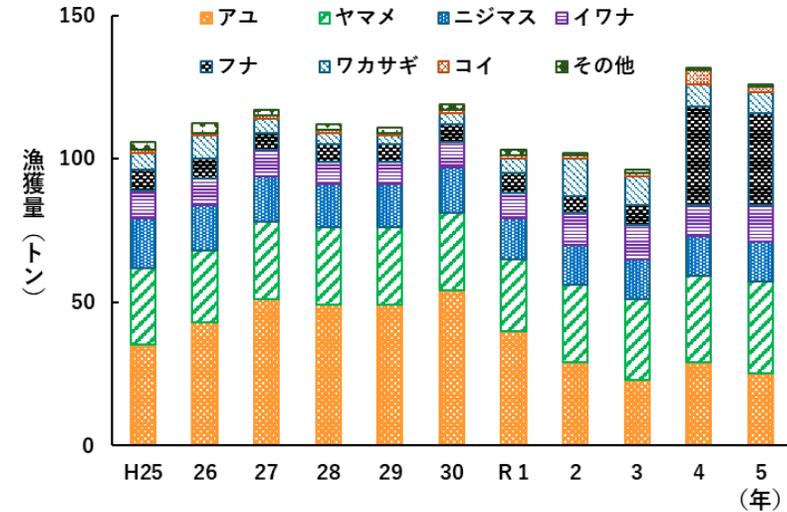
8 群馬県の水産業

本県の水産業では「県の魚」であるアユをはじめ、イワナやヤマメ、コイ、フナ類などを対象とした「内水面漁業」や「養殖業」が中心に行われ、食用水産物の供給や遊漁、伝統文化の継承、生態系保全など、多面的役割を果たしています。

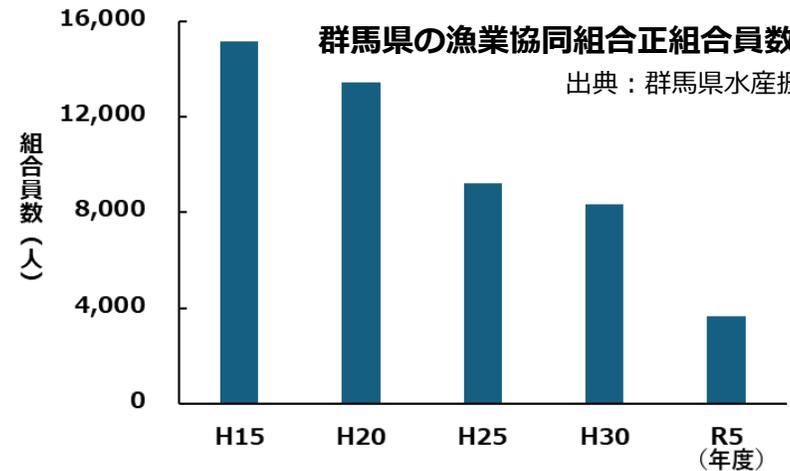
一方、水産業を支える漁業協同組合の正組合員数は、漁業従事者不足や高齢化による脱退の影響で、ピーク時と比較して半数近くに減少しています。

また、外来種等の影響による漁業生産量の減少や従事者不足による養殖生産量の減少、レジャーの多様化による遊漁収入減少など多くの経済的課題があります。

群馬県の漁獲量の推移 出典：群馬県水産振興計画



群馬県の漁業協同組合正組合員数の推移 出典：群馬県水産振興計画



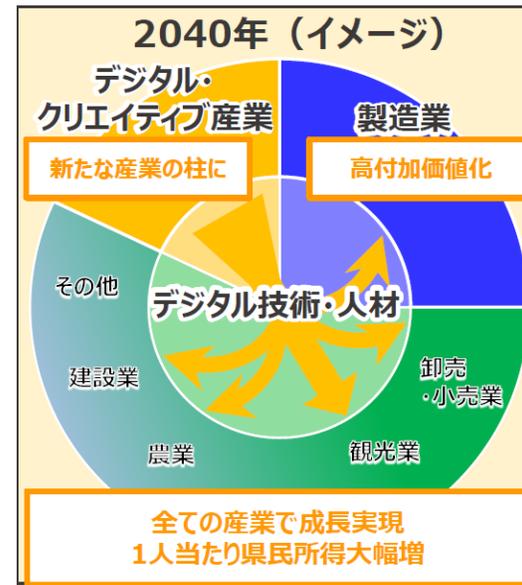
2 生物多様性と暮らし

4 製造業

本県の産業は、自動車産業を中核とする製造業が牽引してきましたが、EV化に伴う産業構造の変革という大きな転換期を迎えています。加えて、物価高騰や人手不足、カーボンニュートラル、DXの加速といった、グローバルな変革への対応も喫緊の課題です。こうした状況を産業構造変革の好機と捉え、「群馬モデル」による未来産業の創造を目指しています。

具体的には、デジタルとクリエイティブ（エンターテインメント）の融合により新たな付加価値を生み出すとともに、既存産業全体の成長・活性化につなげるデジタル・クリエイティブ産業の振興に取り組んでいます。

特に製造業においては、原材料の調達から廃棄に至るまであらゆる段階で生物多様性に依存し、影響を与えています。製造業が持続的に成長するためには、「ネイチャーポジティブ」な事業活動への転換を図ることが求められています。



出典：群馬県産業振興基本計画（令和6年度～令和9年度）

2 生物多様性と暮らし

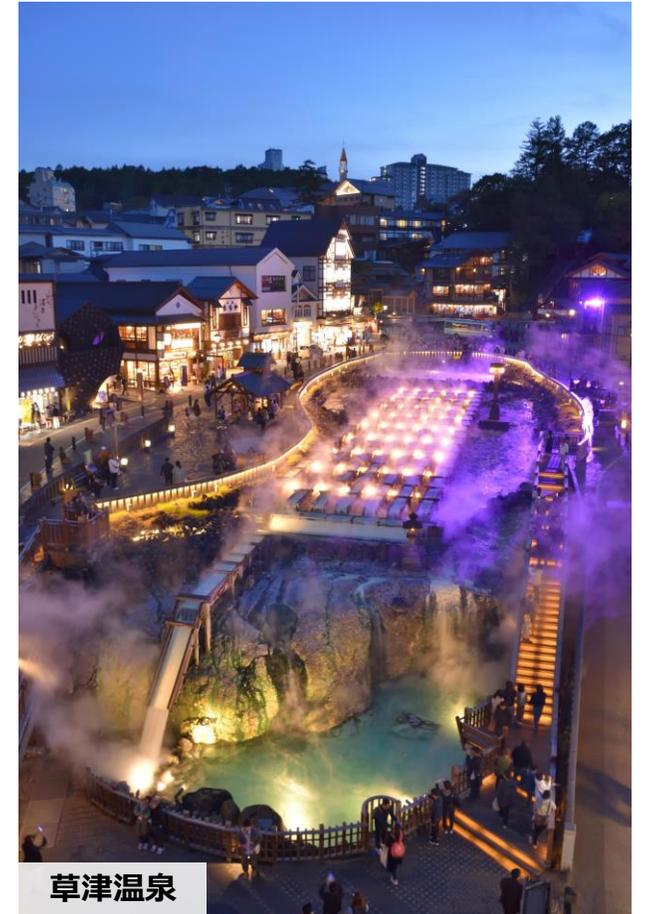
5 観光業

本県では、首都圏からのアクセスの良さに加え、豊かな温泉や手つかずの自然、地域に育まれた食、伝統文化を生かし心と身体を癒やす特別な旅を提供する、滞在型観光の一大拠点「リトリートの聖地」を目指しています。

インバウンドを始めとした旅行者の受入環境整備及び魅力的な観光コンテンツの創出により、旅行者数を増加させ、再び訪れたいと思っただけのような満足度の高い観光地を目指すとともに、旅行の長期滞在化・高付加価値化による旅行消費額単価の向上を進めています。



県立赤城公園



草津温泉

2 生物多様性と暮らし

6 再生可能エネルギー

本県では「群馬県再生可能エネルギー推進計画」や「グリーンイノベーション群馬戦略2035」により再生可能エネルギーの導入を推進しています。

特に、山岳地形と利根川をはじめとする豊富な水資源を生かした水力発電が盛んです。群馬県企業局は36か所の県営水力発電所を有しており、総出力は約236MWに達します。これは地域の電力需要の一部を再生可能エネルギーでまかなう「地産地消型PPA（群馬モデル）」として重要な役割を果たしています。

本県の有数な自然資源の一つでもある、清澄な“水”をエネルギー生産にも活用することで、持続的な資源循環とエネルギーシステムの構築を目指しています。



高津戸発電所

第2章

群馬県の生物多様性・生態系サービス等の 現状と課題

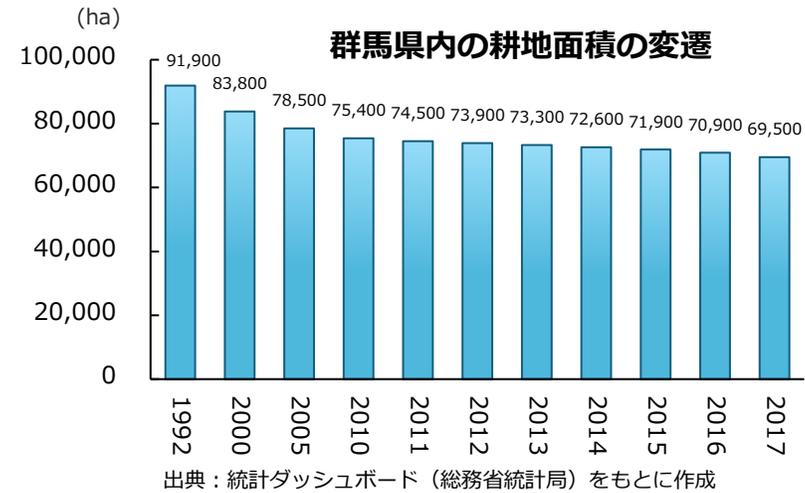
第2節 群馬県の生物多様性の現状と課題

1 直接的な要因による生物多様性への影響

第1章で示した生物多様性損失の5つの要因について、群馬県の状況を示します。

1 土地利用変化

群馬県でも森林面積や農地面積は減少傾向にあります。森林や農地の減少は、我々の生活に欠かせない「水」をつくり適度に保つ自然の機能が低下するなど、生活への影響が大きい問題のひとつです。



2 生物の直接採取

本県の絶滅のおそれのある植物（維管束植物）と動物の種数はともに増加傾向にあります。

5つの要因の他の要因の影響以外にも、盗掘の影響も受けていると考えられています。

絶滅のおそれのある植物・動物の種数

植物 (維管束植物)	2012年	2024年
	633	669
動物	2012年	2022年
	387	551

1 直接的な要因による生物多様性への影響

3 気候変動

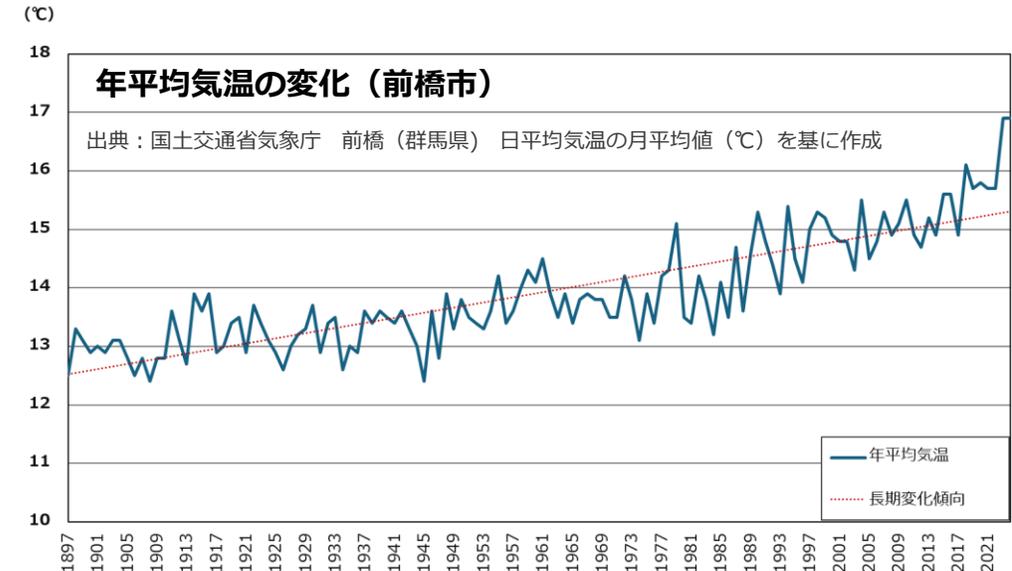
地球温暖化をはじめとする地球環境の変化は、生物多様性に大きな影響を与えます。2℃の気温上昇で世界中の5%の生物種が絶滅リスクにさらされるとされており、農畜産物や水系生態系へも大きな影響をもたらします。

群馬県も100年前と比較して、年平均気温は上昇傾向にあります。2025（令和7）年8月には伊勢崎市で国内最高記録となる、最高気温41.8度を観測しました。

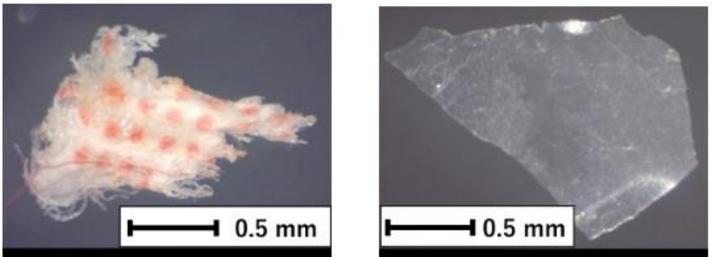
4 汚染

河川流域では、上流域で排出された化学物質が水の流れによって下流域へ運ばれ、下流域の自然環境に影響をもたらすことがあります。その一例として、「マイクロプラスチック」と呼ばれる5mm未満の微細なプラスチックごみがあり、魚などに取り込まれ、生態系に何らかの影響を与えることが懸念されています。

その他にも、農薬や化学肥料などの過度な使用、製造業等の産業活動による水質や大気汚染は昆虫や微生物に影響を与え、生態系のつながりを脅かし、土壌劣化や地下水汚染などを招くおそれがあります。



群馬県の水域で見つかったマイクロプラスチック

種類	画像
ポリエチレン	

出典：群馬県「令和6年度マイクロプラスチック調査結果」

1 直接的な要因による生物多様性への影響

5 侵略的外来種

外来種の問題は、在来種の捕食や生息・生育場所の奪取、在来種との交雑による遺伝的な汚染の発生による生態系への影響などが挙げられます。

本県では、特に「クビアカツヤカミキリ」による影響を大きく受けています。2015（平成27）年に館林市で初めて被害を確認してから、市町村と連携してあらゆる対策を行っていますが、その被害範囲は年々拡大しています。

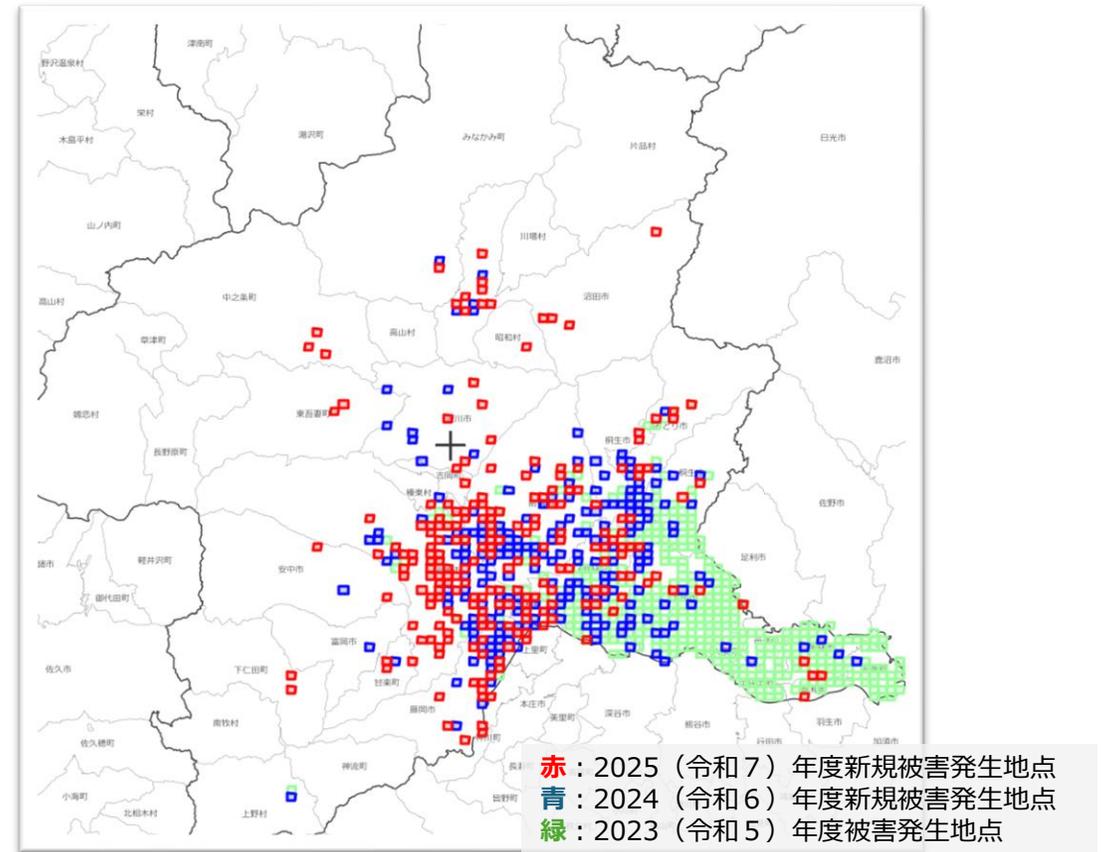
また、2025（令和7）年には特定外来生物の「ツヤハダゴマダラカミキリ」と「ナガエツルノゲイトウ」が群馬県内で初めて確認されました。

本県では、外来種についての周知が必ずしも進んでいるとはいえません。

このため、様々な主体が県内における外来種の状況を把握し、県民への啓発活動や外来種対策の基礎資料として活用できるよう、「群馬県生態系等被害防止外来種リスト」を2023（令和5）年に作成しました。

このリストには212種（動物104種、植物108種）が掲載されており、アライグマやクビアカツヤカミキリなど58種が対策優先種となっています（2025（令和7）年10月現在）。

群馬県内のクビアカツヤカミキリ被害状況



1 直接的な要因による生物多様性への影響

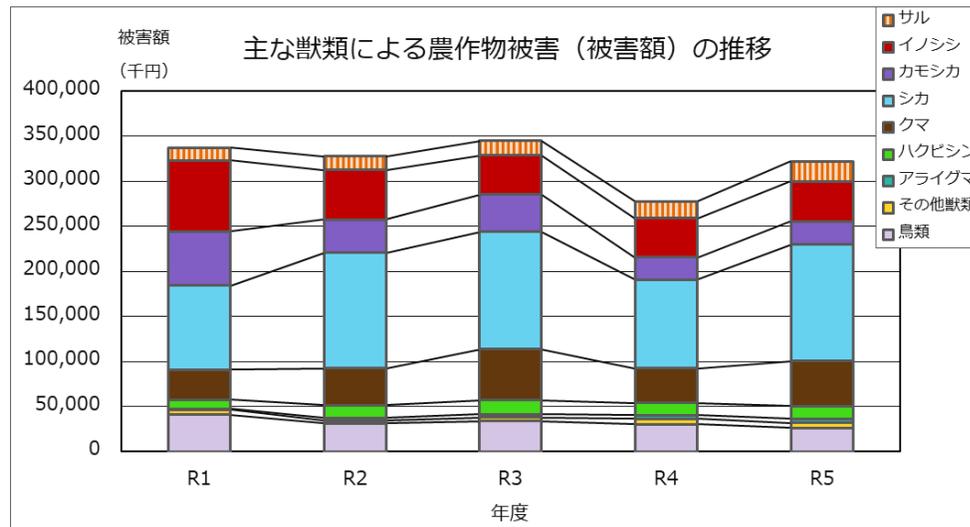
6 その他の要因

群馬県ではこれら「5つの損失要因」のほか、自然に対する働きかけの減少による生物多様性の損失も顕著になっています。

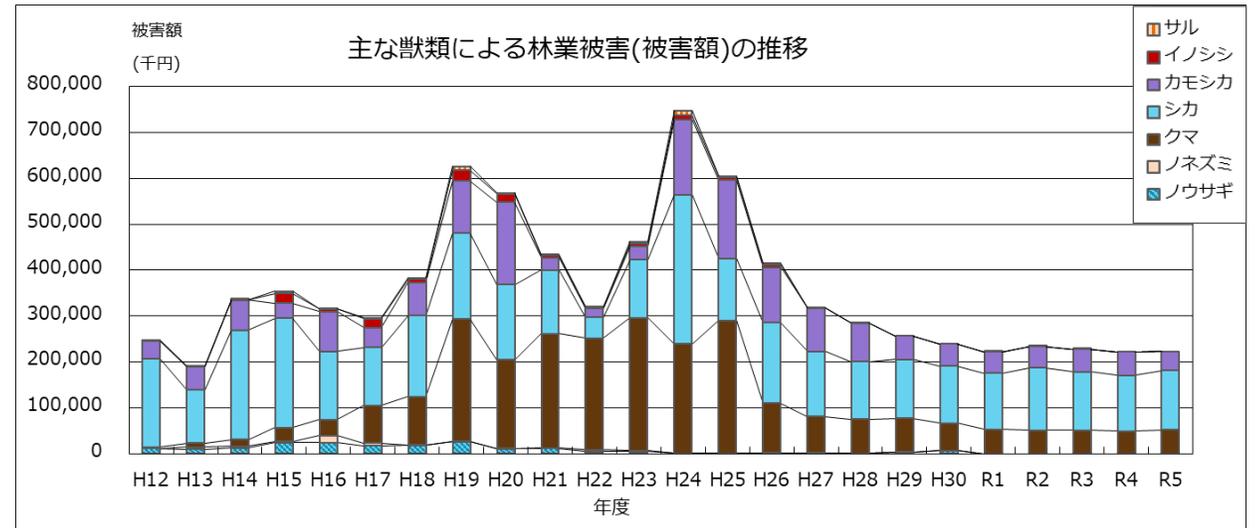
例えば、狩猟者の減少などにより、ニホンジカなどの野生動物が増加し、農作物の食害といった影響が出ているほか、高山植物や林床植物が過剰に食べられ、希少な植物の減少のみならず、ほかの生きものの生息・生育環境の劣化や、土砂災害緩和機能の低下など、様々な問題を引き起こしています。群馬県におけるニホンジカによる農作物被害額（2023（令和5）年度）は12,891万円で全国4位の水準となっています。出典：野生鳥獣による都道府県別農作物被害状況（令和5年度）（農林水産省）



樹木の新芽を食べるニホンジカ



出典：群馬県「野生鳥獣による農作物被害の状況（令和5年度調査）」を基に作成



出典：群馬県「令和5年度 野生鳥獣による森林被害調査結果」を基に作成

2 エリア別の課題

本県は東毛地域を中心に首都圏とのつながりが深く、人口の集中する「市街地」が広がり、中毛、西毛・北毛地域へ移ると徐々に人と自然の営みが密接に関連する「里地里山」と、森林を中心とする「奥山」が広がっています。

それぞれのエリアは異なる自然環境や生物多様性の特徴を有し、抱える課題も異なることから「奥山」・「里地里山」・「市街地」のエリアごとに現状と課題を整理しました。



奥山

人里離れた場所で、人の手があまり入っていない、深い山林や山地

里地里山

人々の暮らしと密接に関わりながら、持続的に利用・管理されてきた自然環境を有する地域

市街地

建物や道路などの都市的な施設が集中的に存在し、人々が居住・活動する地域

2 エリア別の課題

それぞれのエリアの現状と課題については、生物多様性の基盤を支える「森」「土」「水」に加え、それに影響を与える「人」をキーワードとして整理しました。

エリア



キーワード



生物種の宝庫であり、水源涵養など、供給サービスの基盤です。事業所敷地内や市街地、公園などの緑地も、鳥や昆虫の中継地点となり、生物多様性にとっては貴重な森といえます。



農業など基幹産業を支えるとともに、保水機能を有し、安定した水の供給に欠かせません。田畑の土だけでなく、市街地の土も生物多様性においては重要な役割を持ちます。



水は動植物の生息や生育、人の営み、経済、産業のあらゆる側面において必須の資源であり、生物多様性を維持する上で重要な役割を担います。



生活や産業において生物多様性の恵みを受けており、また影響を与える存在でもあります。人の意識・行動は生物多様性のあり方を大きく左右します。

3 奥山の課題



- ・ 林業従事者の減少による施業の停滞
- ・ 管理不足による森林の荒廃
- ・ 均一な人工林による生物多様性の劣化



- ・ 人工林管理の不足による下層植生の減少
- ・ シカの生息域拡大と食害による植生劣化と土砂災害リスクの増大



- ・ 森林の水源涵養機能の低下による河川水量の不安定化
- ・ シカの食害等の影響による水害



- ・ 林業における担い手不足と経営基盤の脆弱化
- ・ 木材需要の低下による木材価格の低迷
- ・ 捕獲の担い手不足による鳥獣被害の発生
- ・ 遊びや憩いの場としての森林利用者の減少



3 奥山の課題

▶ 奥山の課題の例①

ニホンジカによる被害

本県では、山間部の森林を中心としてニホンジカによる被害が深刻化しています。

特に利根沼田地域を中心とする県北部や、県東部の桐生市付近、県央部の赤城山・榛名山周辺で近年、被害が大きくなっています。

ニホンジカは、自然植生における若木や新芽の食害のみならず、植栽した苗木の食害、生育樹木の樹皮剥ぎによる生育不良、農業での作物被害など、産業面でも多大な影響を与えています。

また、森林で食害が進むと、根を張り土を丈夫にする多様な種類の植物の存在が減少します。これにより土壌の脆弱性が増加し、土砂災害の一因となると言われています。



林床植物の食害状況
(上：食害前、下：食害後)



3 奥山の課題

▶ 奥山の課題の例②

林業における担い手不足

本県では、森林を健全に保つための林業従事者の不足が大きな課題となっています。

森林の手入れが行き届かなくなると、森林と人里との境界線が曖昧になり野生動物が人里に近づきやすくなるため、農作物への被害や、住民への人身被害といった形で、私たちの生活にも影響を及ぼします。

また、森林の荒廃により特定の動物や植物が増え、生態系バランスが崩れ、水源としての機能劣化や土砂災害の危険性の高まりなどを引き起こします。

林業従事者の確保は、森林の健全な維持だけでなく、人間と野生動物の適切な共存関係を築く上でも不可欠です。



4 里地里山の課題



森

- ・管理不足による荒廃
- ・緩衝帯消失による鳥獣害拡大
- ・シカによる下層植生の減少
- ・外来種の侵入



土

- ・慣行農法の継続による土壌生物相の劣化
- ・休耕地の増加による保水能力の低下
- ・生物多様性への配慮がされていない太陽光パネルの設置による土壌機能の低下



水

- ・ため池や水田の減少による動植物の生息・生育地減少
- ・化学肥料や農薬の過度な使用による水質汚染



人

- ・人口・交流人口減少による高齢化と過疎化
- ・農業従事者の減少による農地の維持困難化
- ・気候変動や鳥獣被害による農業収入の不安定化
- ・捕獲の担い手不足による鳥獣被害の拡大



4 里地里山の課題

▶ 里地里山の課題の例①

水田の減少による生物多様性の低下

水田は隣接する里山や森林と一体となり、生態系を構成しています。水田の減少は、これらの水辺の環境に依存する生物だけでなく、食物連鎖を通じてより広範な里山の生態系全体に影響を及ぼします。

例えば、水田に集まる昆虫を餌とする鳥類が減れば、その鳥類が捕食していた別の昆虫が増加するなど、それぞれのバランスの崩壊を引き起こす可能性があります。

群馬県でも、かつて里地里山に広く分布していた水田は、人口減少や農業利用の低下により管理放棄され、乾燥化などが進んでいる場所が見られます。

水田の減少は特定の種だけでなく、生態系全体の多様性を損なう深刻な課題となっています。



4 里地里山の課題

里地里山の課題の例②

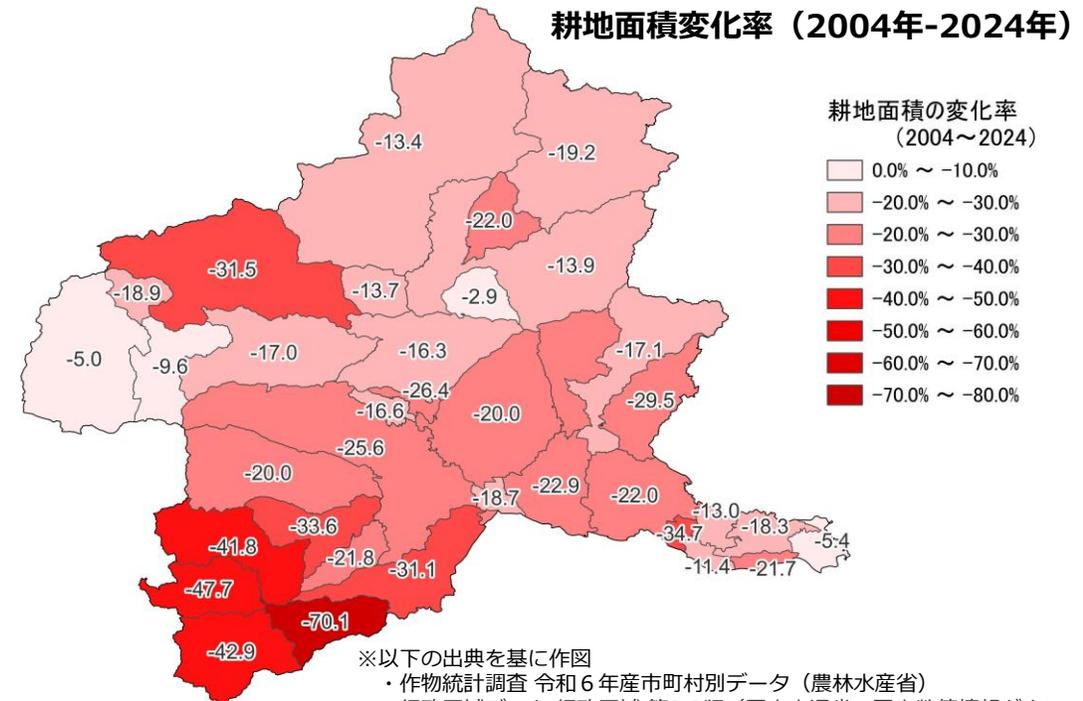
耕作放棄地の増加による生物多様性の低下

本県では、高度経済成長期以降の生活様式の変化や、地方の過疎化、高齢化の進行により、長年維持されてきた里地里山が大きく変化しました。

かつて里地里山は農業や林業など、人の手が入ることで保たれていましたが、人口減少により管理が十分に行き届かなくなり、動植物の生息環境が悪化して生物多様性の損失が進んでいます。

特に、耕作放棄地の増加による藪化などは、生物多様性の低下のみならず、野生鳥獣と人間の緩衝帯を消失させ、被害を生み出します。野生鳥獣被害の増加は、農業被害や植生の攪乱を通じて、人と自然の生態系バランスを崩しています。

これらの課題に対し、地域住民や行政による里山保全活動や、獣害対策等が進められています。



5 市街地の課題



森

- ・都市化の進行による緑地減少と自然景観の劣化
- ・緑地減少による生物生息地の減少
- ・外来種の侵入による在来種の減少



土

- ・路面舗装等による保水力低下
- ・事業活動に起因する化学物質流出等による土壤汚染リスク



水

- ・都市化進行による都市型水害リスクの増加
- ・湧水の枯渇や暗渠化による生物多様性の減少
- ・事業活動に起因する水質汚濁
- ・気候変動による渇水被害



人

- ・高温化による人的影響とエネルギーコスト増加
- ・緑地減少による自然に親しむ場・機会の減少
- ・影響が顕著な外来種の侵入による防除費用増大
- ・奥山・里地里山の自然資本と市街地の関係性に対する認識不足



5 市街地の課題

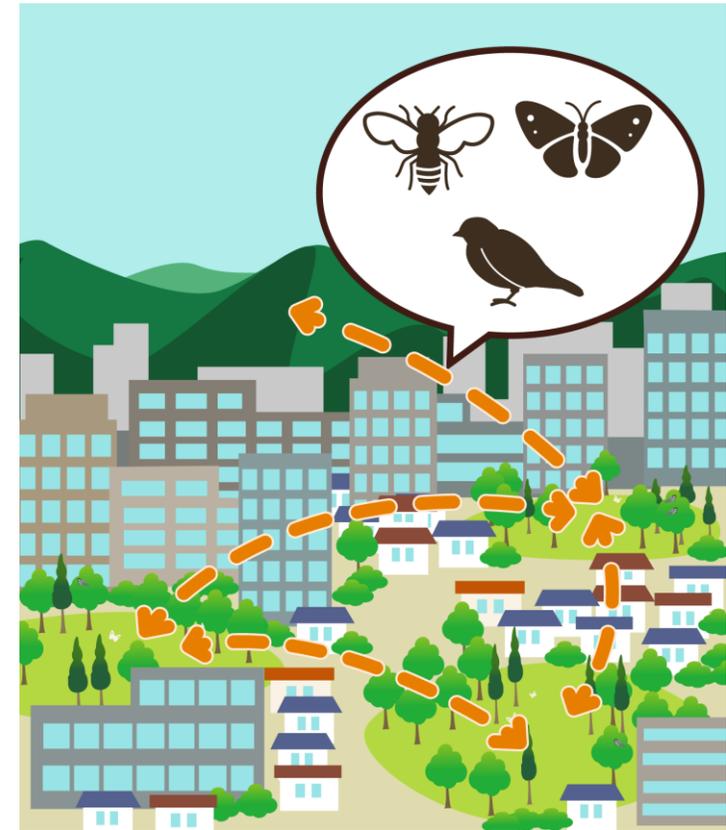
市街地の課題の例①

都市化進行による緑地減少

市街地における公園や社寺林などの緑地は、多様な動植物にとって重要な生息・生育環境となっています。緑地の減少は、生物の住処を奪い、分断することで、個体数の減少や種の絶滅を招き、生物多様性を著しく低下させます。また、外来種が増加するなど、生態系のバランスが崩れる可能性があります。

さらに、住民にとっての憩いの場であり、精神的な安らぎを与える緑が減ることで、生活の質が低下し、ストレスが増加する可能性も指摘されています。

加えて、緑地は災害時の一時避難場所や延焼防止帯としての防災機能も持ち合わせており、その減少は都市の災害脆弱性を高めることにもつながります。



5 市街地の課題

市街地の課題の例②

都市化進行による保水力低下

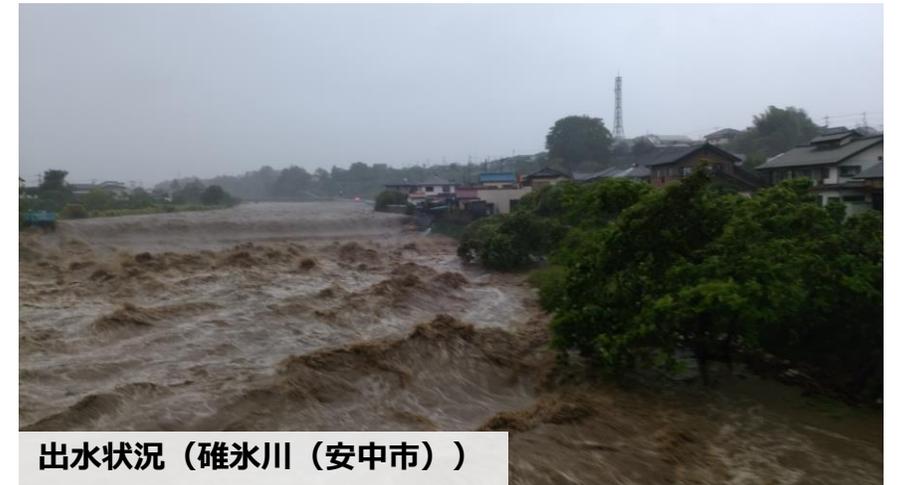
都市化は、私たちの暮らしに欠かせない水に大きな影響を及ぼします。特に問題となるのが、雨水が地中にしみ込む力、つまり「保水力」の低下です。

都市では、森や畑、湿地などの自然が、コンクリートやアスファルトで覆われた道路や建物に変わります。こうして地面が固くなると、雨水は地中にしみ込まずに、ほとんどが地表を流れてしまいます。これは洪水などの災害や保水力の低下による地下水の減少など、多くの問題を引き起こします。

また、地中の水分は、蒸発することで周りの熱を下げてくれますが、保水力が低下するとこの効果が弱まり、ヒートアイランド現象を悪化させる可能性も指摘されています。



内水氾濫状況（太田市）



出水状況（碓氷川（安中市））

第2章

群馬県の生物多様性・生態系サービス等の 現状と課題

第3節 生物多様性に対する県民・県内事業者の意識

1 アンケート調査の概要

本戦略の策定に当たり、県民と県内事業者を対象とするアンケート調査を実施しました。各主体の、自然環境やネイチャーポジティブに対する意識や行動等について現状を把握し、本戦略の目標達成に向けた効果的な施策の検討材料としました。

なお、ここではアンケート調査結果をから一部を抜粋し、その結果と考察を記載しています。全ての結果は「別冊資料－アンケート調査－」に掲載しています。

調査概要	県民アンケート	事業者アンケート
調査対象者	18歳以上の群馬県在住者	県内に事業拠点を置く事業者1,001事業所 「群馬県会社要覧 2025 年版」（一般財団法人群馬経済研究所）に掲載の事業所
調査方法	インターネット調査	郵送調査（回収は郵送及びインターネットの併用）
実施期間	2025（令和7）年 6月9日から6月16日	2025（令和7）年6月13日から7月9日
回収数	2,344名	397事業所（回収率39.7%）

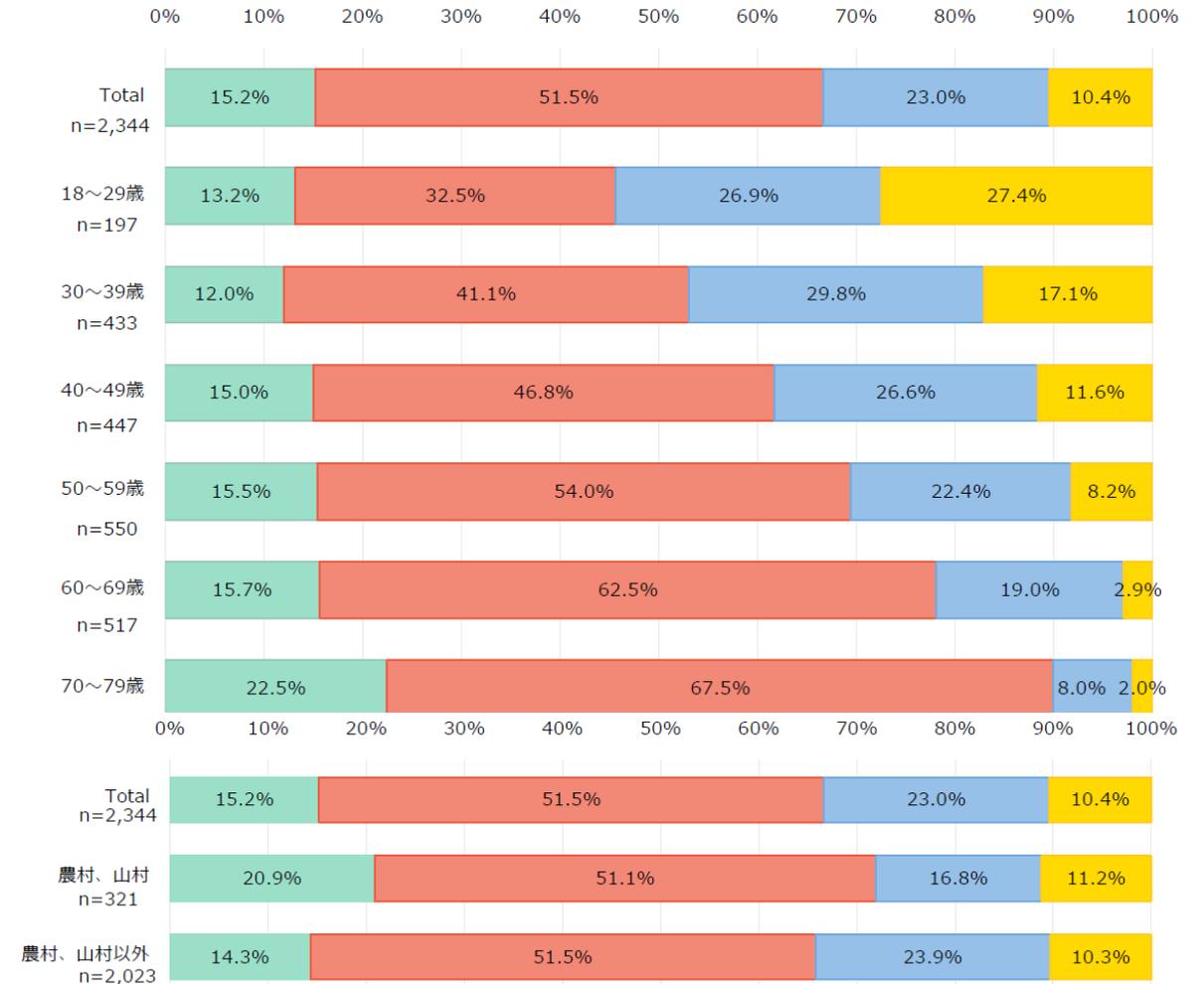
2 県民アンケート調査結果

1 自然への関心度

自然に対する関心については、年代別では30歳以上では「非常に関心がある」・「ある程度関心がある」は50%以上となっていますが、29歳以下では45.7%と、若年層における自然に対する関心が低いことがうかがえます。

居住地域別の関心度はあまり大きな差は見られませんでした。

- 非常に関心がある
- ある程度関心がある
- あまり関心がない
- 全く関心がない



2 県民アンケート調査結果

2 自然環境の保全に貢献する活動・行動

自然環境の保全に貢献する活動・行動について年代別に見てみると、29歳以下の年代が他の年代と比較して、行動経験が少なく、また取組意向も低くなっています。これは、前頁で述べたように、若年層の自然環境に対する関心の低さが要因となっていると考えられます。

各項目に対して「特にない」と回答した人の割合

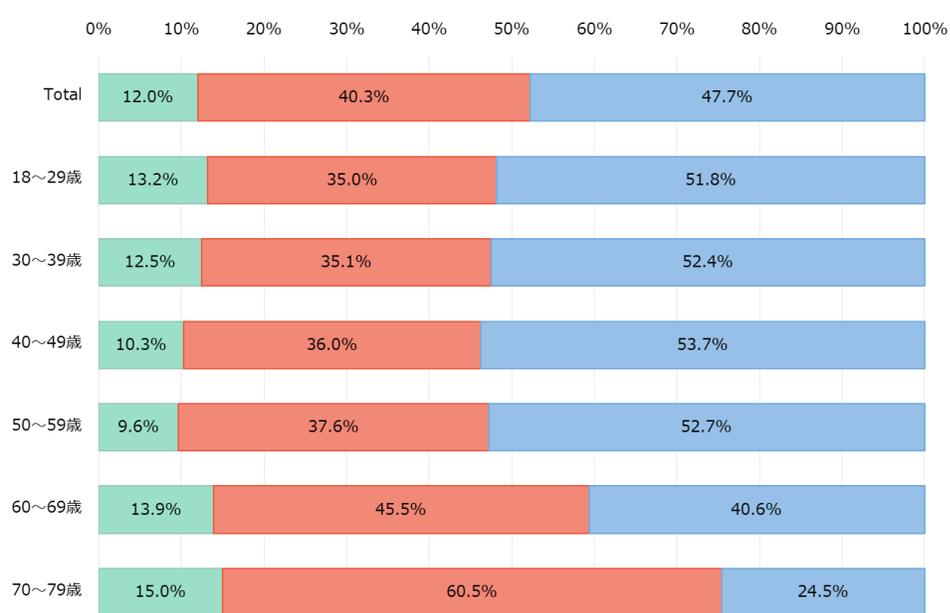
	生物多様性に関して参加・視聴閲覧したいと思う取組	自然環境の保全に貢献する活動・行動についての経験	気候変動の対応、資源循環利用の観点も含めた保全に関する活動・行動についての経験	自然環境の保全に貢献する活動・行動の取組意向
18～29歳	58.4%	76.1%	46.7%	64.5%
30～39歳	49.0%	69.7%	32.6%	55.9%
40～49歳	45.6%	71.6%	26.8%	49.9%
50～59歳	39.6%	75.8%	20.9%	51.8%
60～69歳	35.0%	75.8%	16.2%	46.8%
70～79歳	28.0%	72.0%	14.5%	41.0%

2 県民アンケート調査結果

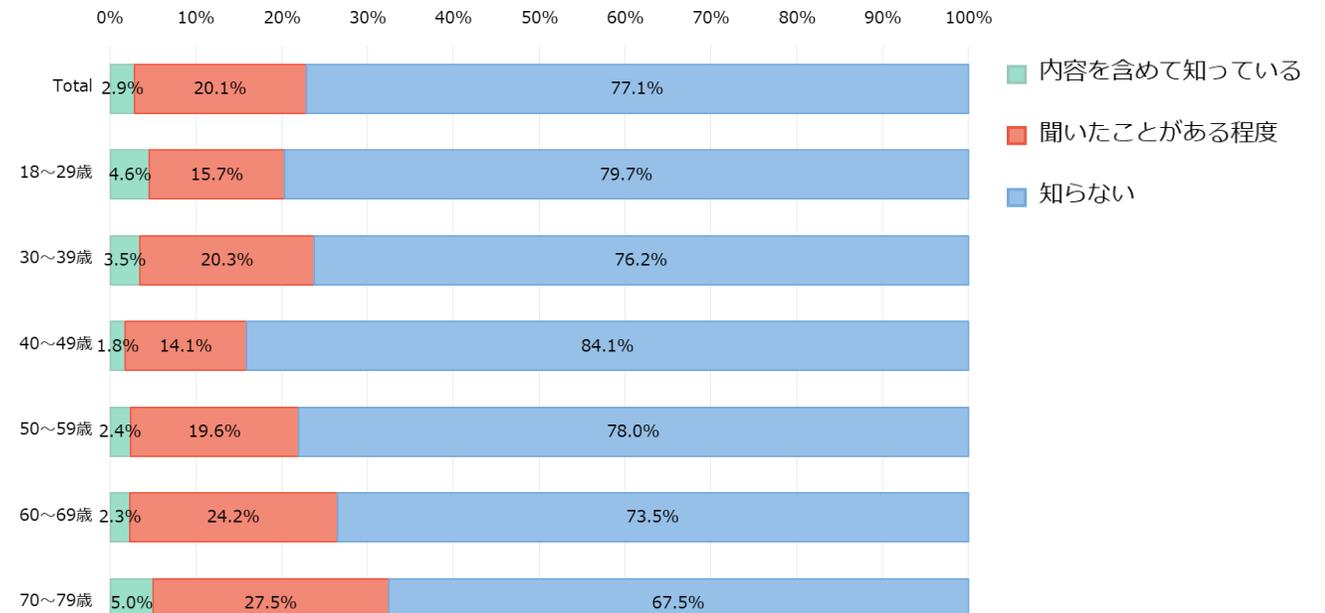
3 生物多様性、ネイチャーポジティブの認知度

生物多様性とネイチャーポジティブの認知度は、生物多様性は50%を超えています。ネイチャーポジティブについては約20%にとどまっています。年代別では、いずれについても60歳以上の認知度が他の年代と比較して高くなっています。

特に「ネイチャーポジティブ」については全体の認知度が低いことから、全世代に対しての普及啓発が必要と考えられます。



生物多様性の認知度（年代別）



ネイチャーポジティブの認知度（年代別）

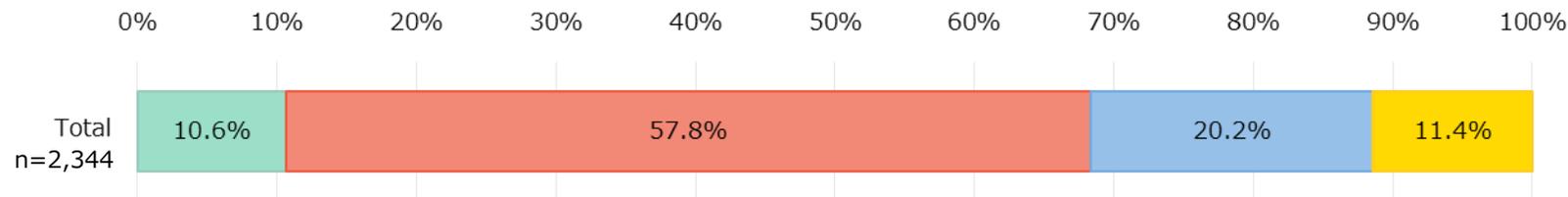
2 県民アンケート調査結果

4 自然環境に配慮した商品やサービスの利用

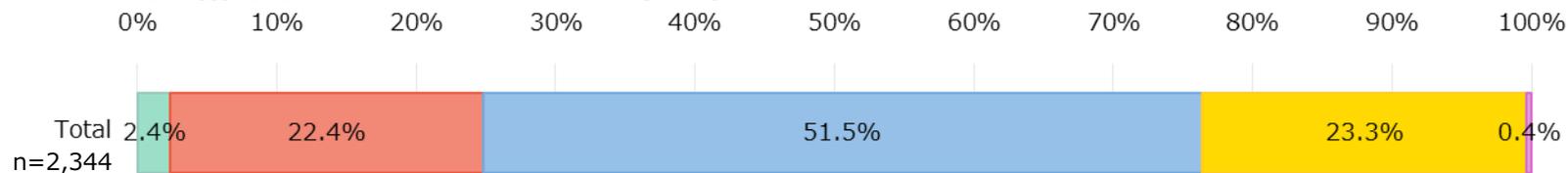
自然環境に配慮した商品やサービスの利用について、「ぜひ利用したい」「利用した」と回答した人は68.4%となり、利用意向は高いことがわかります。ただし、そうした商品・サービスを選択する際の価格については、「価格が相当高くても選択する」「価格が少し高い程度なら選択する」と回答した人は約25%にとどまっています。

このことから、自然環境に配慮した商品やサービスにおける付加価値について県民への理解促進が必要だと考えられます。

自然環境に配慮した商品やサービスの利用意向



自然環境に配慮した商品やサービスの利用価格



- ぜひ利用したい
- 利用したい
- あまり利用したくない
- 全く利用したくない
- 価格が相当高くても選択する
- 価格が少し高い程度なら選択する
- 価格が同程度であれば選択する
- 自然環境の保全への配慮の有無にかかわらず、価格が安い方を選択する
- その他

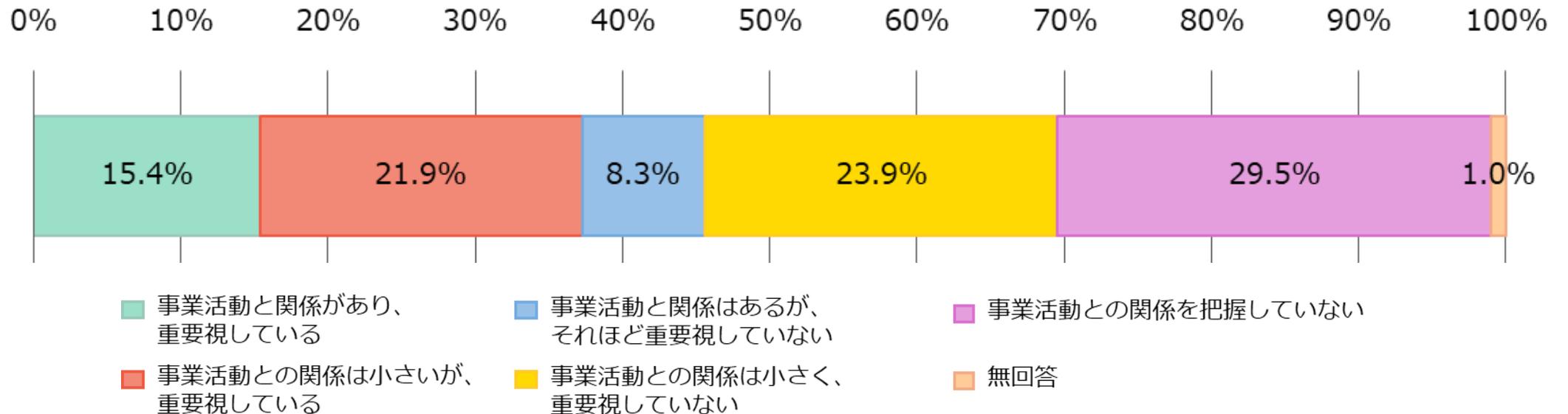
3 事業者アンケート調査結果

1 事業活動における生物多様性の重要性

事業者における生物多様性の重要性に対する認識については、「重要視していない」が32.2%、「事業活動との関係を把握していない」が29.5%となり、約6割の事業者で生物多様性の重要性についての認識が低い状態であることがわかりました。

どのような業態であれ、少なからず事業活動が生物多様性と関係し影響を及ぼしているということを、事業者に対し理解を深めてもらう必要性があります。

生物多様性の重要性に対する認識



3 事業者アンケート調査結果

2 生物多様性に関する取組

事業者における生物多様性に関する取組については「実施しておらず、実施する予定もない」が64.7%でした。

また「生物多様性に関する取組を実施する上で必要な情報」の問に対して、わからないと回答した事業者が23.7%あることから、事業者が生物多様性保全にどのように貢献できるのか、事例を示すなど、情報提供が必要なことが分かります。

生物多様性に関する取組を実施する上で必要な情報

